ちた棉の莖を引き拔いて來るの勞力を惜まぬのである。これつばかりの棉の實や、棉幹が全体ごうにもなるものでないことは一見しても分るのであるが、しかも哀れな農夫達は、思ひ切れないで、悵然たる思ひで、僅かに殘された作物を刈り取つてゐるのである。

戰禍に加ふるにこの水禍が彼らに襲來しつゝある。けれども彼らは營々として、生きむがための貧しいいとなみに沒頭してゐる。

しかしながら晩秋がすぎて恐ろしい寒さがやつて來る時彼らは飢と寒さの二つの恐ろしい敵をどうして防ぐことができ得ようぞ。彼らの前には、たゞ死があるのみである。けれどもそれは彼らにとりては、どうすることもできない運命なのである。かうした飢饉と寒さのために、どれだけ多くの民衆が支那で默々として死むで行くことであらう。それを誰に愬へるの道もなく、天をもとがめず、人をも怨むことなく、たゞ默々として死んで行く。それが彼らの運命なのである。

わが黃河は歷史あつて以來かうしたアキラメを支那に植ゑつけた恐るべきタイラントである。

黃河氾濫史

黃河は、その源を遠く青海省の藹遠素濟老峰に發すと稱せられるが、われ〳〵は簡單に、これを崑崙山脈に發源すると解釋して置きたい。漢民族は數千年、あるひは、數萬年の太古、中央アジアのある地方から、黃河の上流に出で、流れに從ふて徐々として黃河沿岸に定住することになつた。すなはち漢民族は、黃河とともに發生し、黃河に從ふて發展し、黃河とその歷史を始終する。

しかるに黃河は有史以來、すでに七回、その河底を變へ、河槽を變更してゐる。上流においてはもとより大なる變化を見ないが、末流においては、屢々その流域を變へてゐるのである。しば〳〵易姓革命をくりかへすがごとく、支那の領土も、しば〳〵黃河の奔流によつて、形態を異にするのである。

讀史方輿紀要によれば、大賢禹貢が河を導いて海に注いだところは、今日の河北省昌黎の碣石山麓であつたといはれる。またある時代には、黄河は淮河の本流を走路として河南、安徽兩省を貫ぬき現在の大運河地帶を流れて揚子江に入つた時代もある。その時代には揚子江と、黄河とは末流において接吻しつゝあつたのである。またこの氣紛れものの黄河は、大清河、子牙河に入り白河の本流を走つて、渤海に注いだ時代もある。

タイラントの黄河は、氣隨氣儘にその水流を變更し、他の諸河の水流を奪つて、自己の流域に供しあるひはこれを捨て去つてまた他の水流に乘り換へるなど、いはゆる奔放自由を極めたものである。その流域變遷の結果として、所在に名殘りをとゞめてゐるのが大小種々の湖水である。高郵、寶應、洪澤、微山、獨山、蜀山の太湖、白淀洋などは、まさしく黄河氾濫の記念物なのである。

こゝろみに黄河の氾濫による河槽變革を、年代順に表示すれば、次の如くである。

▲第一回、周の定王時代、衝河大名より、障河を合せて、臨清、德縣から渤海に入る
▲第二回、王舜建國二年、河南武陡より北上して僕陽より山東省に入り濟河、清河を經て渤海へ
▲第三回、唐の景福二年、駿河より海に入る
▲第四回、嘉祐元年馬峽河より海に注ぐ
▲第五回、金の昌明五年、壽張より二流し、北流は馬峽河より海に入り、南流は淮河より江蘇省に入り運河によりて黄海に注ぐ
▲第六回元の至元二十五年、陽武縣より銅瓦、徐州を通過し、運河を經て東折、黄海東岸に流出す
▲第七回、清咸豐五年、銅瓦廟より北流し大清河に合流し渤海に排出す。

黄河は、今まさに大氾濫の時期に來てゐると思はれる。この數年來、引續いて降雨量が多い。昨年も然り、一昨年も然り、殊に一昨年昭和十一年、民國二十四年の山東省内黄河水災の狀況は咸豐五年以來の大洪水で浸水面積一萬四千平方支里、罹災民九百六十餘萬人損害三億元と稱せら

れ、第八回目の河道變革を示す大氾濫だといはれる。

かうした黄河氾濫史の一面を瞥見する事によつて、明らかに知られるやうに、黄河は生きて動いてゐるのである。かの黄龍飛雲に乘じて躍動するがごとく、河はそれ自身の生命のまゝに躍動してゐるのである。大凡、河南省境の潼關を、扇のカナメとして、それより下流へかけて、末ひろがりをもつて、縱横無碍に河流は氾濫するのである。何ぜならば潼關以西、以北かの函谷關の險悪を境として、長大なる岸壁を横たへたる深い谿谷であつて、それによつて氾濫力をくひとめられてゐるからである。

ドイツ人の植林

支那では水を治むるには山を治むるに如かずといふ理窟を知らないと見え、この必然的に關聯する『水』と『山』との因果的連鎖を無視し、それを飛躍して、さらに一段と高いところへその論理をひき上げてゐるのである。すなはち「水を治めるの要は、人心を治めるにあり』といふところまで論理が飛躍するのである。これは物質的な條件を物質的に充足することを忘れて、精神的な要素で、これを補足しようとするのである。これが一般に東洋的なものの考へ方であるが、その間には、論理の飛躍があつて、實際的にはこの距離を埋めつくす作用を望めない。

政治の要道は、人心を治めるところにある。人心が治まれば、治水のこともおのづから成るであらう。それは眞理であつて、決してマチガツてはゐないのである。しかし治水の直接事業としては、水源地の山々に植林することである。それを支那では全く忘却してゐる、だから私は北支の治水事業にはまづ第一條件として山林の植樹を奬めたい。それが治水の先決問題なのである。

元來、支那は消極的運命論者であつて、積極的に國土を開發するといふ意思に缺けてゐるものやうである。黄河はその流るるに委せて河水を統制しようとするの努力をもたない。況んやその水源を養ふために、植林をするなどといふ考へ方は、個人主義的な享樂生活の中に醉生夢死する支那人には起り得ない考へなのである。支那の山々が、果して植林に適するか否かを、おそら

く彼等は考へた事がないであらう。幾千年來の荒廢のまゝに委せて、自然に生長する樹木を伐採するほかには、かつてこれを育成しようと企圖したことはあるまい。それが支那支配者の惡政の結果であることはいふまでもない。

支那における壯大なる建築物は材木をもつてするよりも、石造建築物をもつてせらるゝものが多い、一般民衆の住居も木材を材料としないで、土石の堆積である。これは支那で森林が少なく木材を得ることが困難であるために、自然に土石本位となつたのであらう。しかし何故に、かく支那には木材を材料とする建築物が少いのであらうか。それは植林の荒廢のためである。支那人の個人主義的思想的生活が植林を荒廢のまゝに委棄せしめる結果となつたのである。

私は、今度の支那事變の口火を切つた盧溝橋から、京漢線を郎鄉から長辛店を過ぎて南下したその汽車の沿道では、夕ぐれの暮靄に包まれながら、支那の農民が沿道の立木を伐採してゐるのを見て、私は暗然たるものがあつた、あの樹木は、農民のためには、よい燃料であるであらうがあの樹木があれまでに生長するには、三四十年の歲月を要したであらう。これを無殘にも伐採することは、私にとつて痛ましいことに感ぜられる。ナゼあの一本の立木を殘して置くことが支那人には出來ないのであらうか、支那人のこゝろには、さうした生命の永遠に關する愛護の觀念がないのだと、私には思はれた。

一昨年の秋、私は濟南から、膠濟鐵道によつて青島に出たことがある。この鐵道の沿線にはドイツ人の植ゑたアカシアの林が、蜿蜒としてみどりの影をつくつてゐた。ドイツ人はサスガに豪いと感ぜざるを得なかつた。ドイツが山東省に勢力をもつに至ると、直ちに山東半島の荒廢地帶に植林し、しかもそれが二十餘年を經て、鬱々たる美しい樹林をなしてゐる。もし支那人にしてドイツ人のこの積極的な努力があるならば、支那全土を鬱樹の森林化することは何でもあるまい支那人の性格改造は支那の植林によつて試練すべきであらう。

支那の治水

黄河の水流が、無軌道的に氾濫をくりかへして、その河槽を變更するのは自然が人力を超越する事を物語るものゝ如くであるが、實は然らず。支那における政治が腐敗し、墮落した結果が、黄河の氾濫となつて現はれるのである。いひかふれば支那における惡政の堆積が、黄河の氾濫といふ結果を招來するのである。だから論理的にいへば、支那における政治の要道は治水にあるといふことができる。

滿鐵總裁松岡洋右氏は、昨秋、北支の戰線を視察し、その結果、北支の民衆を救濟するためには、まづ治水事業に力を入れなければならぬことを痛感した。內閣參議の會合席上に、松岡氏はこの事をのべて、少くとも北支治水工事のために、日本は十億圓の金を投ずるの必要ある旨を力說したといはれる。それかあらぬか、その後、近衛首相は、伊勢參宮の車中、新聞記者に對して北支工作のためには、さしあたり一億圓位の治水費を投ずる必要があるといふハナシを漫談してゐる。松岡氏の十億圓說を、近衛首相は十分ノ一に値切つて、一億圓說を發表してゐるところは面白い『棒ほど願つて、針ほど叶ふ』といふコトワザが、この北支治水費の上にそのまゝ表現されてゐるからである。

大谷光瑞氏の意見によつて見るも、北支の治水には、天津を河口として集中する大小の河流を整理するの必要を力說してゐる。すなはち黄河の水流を四分して、現在の黄河一本の本流の外にその水流を導いて、もう三本新らしい分流をつくれといふ意見である。

いづれにもあれ、北支工作の第一の要點は黄河を主座とする北支の各河流を整理することにあるらしい。しかしこれは四千年前に、大賢禹が試みて以來、いくたびか企てゝ、いくたびか失敗したる歷史をもつてゐる。それを近代科學と、その技術とによつて試みようとするのであるが、果してそれが可能なりや如何。

こゝにおいて私は今一歩を進めて考へて見るのである。

治水のために治水するといふことは、そも〳〵末節である。治水のために治水の築堤工事を行ふといふことは、きはめて眼前當面の應急的なシゴトに過ぎないのである。それを試みて失敗し

た實例は、かの『白河の淨化』にある。永定河の惡水を、白河から排除しようとした百萬圓の築堤工事はまさしく失敗のまゝ白い蛇腹を楊村附近に横たへてゐるのである。これは果して何を語るのであらうか云はく『治水のための治水は、ほんとうの治水の要道ではない』といふことなのである。

もし松岡總裁いふところの北支治水十億圓說が、單なる河流の整理、築堤工事の增强などにとゞまるものとすれば、おそらくそれは失敗に終るであらう。大谷光瑞氏の黃河分流說のごときも應急當面の必要上、技術的にやつて見るといふのならば、その範圍內ではこの說を承認してもよろしいが、黃河の分水によつて支那の治水が完成すると考へたならば、それは短見であるといふを憚らない。何となれば『治水のための治水は、ほんとうの意味での治水ではないからである』。

水を治めんとすれば、河を治めるよりも、むしろ遡つてその水源地たる山を治めなければならぬ。すなはち水を治めんは山を治むるに如かずである。然るに支那は山を治むることを知らないすなはち支那は山に植林することを知らない。黃河の氾濫はひつきよう山林荒廢の結果である。

支那に政治なし

黃河は支那人の性格をつくり、支那人はまた黃河の性格をつくりあげた。黃河と支那人とは、離れ難い親しいつながりをもつて、支那の民族性と歷史とを織りなしてゐる。

之を他の一面からいへば、支那人にはその廣い國土と、多數民衆とを支配し、統御するの根氣と努力とが缺けてゐるといつてよい、これは支那人の消極性によるものなのである。その消極性が、政治の上にあらはれては『無爲にして化する』ことを理想とするに至つた。試みに支那の文字について、『治』『をさめる』といふ文治を解剖すると、シ（サンズイ）に『臺』の字を配してゐるのである。これは政治が水ををさめるところから來てゐると思はれるのである。その水を治むるや、『臺』をつくるのである。これは水を防ぐに堤防をもつてするのである。『臺』は土をつみあげて堤塘の形をなすことをあらはしたものと思はれる。

かくのごとく、支那にありては政治することは、水を治むると同じく、堤塘を築いて水流を制御せんとするのに似てゐる。しかしこれは政治の應急手段であつて、決して根本對策ではない。眞の政治は シ(サンズイ)『臺』するのではなく、山に臺することであり、木を臺することでなければならぬ。この意味で、支那には古往今來、ほんとうの意味での政治といふものがなかつた。

これは支那民族が、積極的に政治する事を知らない性格から來てゐると私には思はれることである。支那ほど政治をきらふものはない。彼等は先天的に政治に興味を有たない民族なのである政治といふものは、彼等にとりてたゞヤツカイ千萬な存在なのである。『田を耕やして食ひ、井を鑿つて飲む、帝力吾において何かあらんや』といふのが、彼等の政治を虚無する心理なのである。かうした民族的性格の下では、ほんとうの統一ある國家は創造されやうはずがない。

この意味で、支那は四千年來、國家として一日も統一したことがなかつたのである。

支那は統一を理想とせずして、分立をその姿とする。てうど黄河の末流が奔放自在にその水脈

を變更するやうに、支那の政治歴史は分裂から分裂へ、分離から分離へと、脉々として分派し、錯綜する。

支那はかくして單一國家ではない。分離がその本來の面目なのである。これは古來支那に政治のなかつたためである。

その昔、女媧氏といふがあり。祝融を占して天下を征し、四海安全、萬民快樂。すなはち群臣に命じて笙をつくりて樂器とし、五十絃の琴を用ひて、治風曹ねくおよむだ。しかるに一日、國の西北、不周山の方面に當つて、黑暗晝夜をわかたず、天黑く、地昏し、風聲習々として陰氣、晦冥に陷つてゐることを知つた。火をあげてこれを見るに、西北の一方に當つて天缺くること七八痕。すなはち五色の石を煉つて天を補ふといふ。

これは一種の支那歴史創生の神話である。女媧氏の時代に支那の西北地方において、晝夜を分たざる暗黑境を生じたといふのは、邊疆における胡種の變亂を傳說的に傳へたのもであらう。五色の石を煉つて天を補ふといふのは、その變亂を征服した事實を神話的に叙述したものであらう

『こゝにおいて水道を通じて以て大海に入れ江淮漢河定れり、百姓を賑濟し、民に河を堀ることを教へ、もつて黄河を流し給ふ』とあるのは、すなはち黄河が崑崙山脈より東流することを物語るものである。漢民族の黄河流域にあらはれそめて以來、彼等は暗黒晝夜を分たざる邊疆の奥地を潜つて、つねに有力なる夷狄の蠻民と戰ひつゝ發展して行つた。その歴史の面影が、この神話に示されてゐると、私には思はれる。

民族の悲劇

支那の國家は、太古創生の時代から、かくのごとく分裂につぐに分裂をもつてし、滔々として今日におよんでゐるのである。

彼等は、一面において中華の民と信じ、みづから自負するところ高く、好んで四方の民族を蔑視し俾睨してゐるけれども、これはまた一面において周圍の異民族に對する異怖、警戒觀念の反射作用でもある。支那人ほど野郎自大の國民はない。同時にまた支那人ほど拜外事大主義の國民もない。

これは彼等が、みづからの力をもつてみづからを治める政治力に缺けてゐることの何よりの證據である。彼等にありては排外は拜外と共通する。すなはち近代の排日、抗日、侮日の觀念は、ひつきよう、恐日、拜日、崇日の半面であつて、これは彼等に最初から、確固たる自主的な民族意識がないための所産である。

彼等は、みづからを中華と稱しその四方の國々を東夷、南蠻、西戎、北狄と卑しめてゐるにもかゝはらず、彼等の理想鄕を支那の國内に求めずして、はるかに四方の邊疆に物色しようとする。支那人の傳說に從へば、中國は赤縣神州と稱するが、中國の外に仙人の住む國が九ツある。東方にありてはその仙洲は多くは海中にあり、西方にありては崑崙山の山中にある。すなはち支那人にとりては、理想の仙鄕は東方の海上と西方の山上とにありと信ぜられてゐるのである。

東方海中に五つの山がある、岱輿、員嶠、方壹、蓬萊、瀛州がすなはちそれで、いづれも仙人のゐるところであるとする。但し岱輿以下の三山は別に奇景の稱すべきものはないが、蓬萊、瀛

州の二山は風景言語に絶し、中國を距ること數百里花木つねに花さいて二、三月の時候で、人みな死なず居るところはいづれも金闕、銀臺、玉樓、紫閣であるといふ。秦始皇はこの東方の仙州に、不老不死の藥を求めて、童男童女をして海に入らしめたことは、わが國にも傳說としてすでに傳へられてゐるところである。この東方五仙州の中に、おそらくわが日本帝國の加へられてゐたであらうことは容易に想像される。

彼等が東方海上の仙洲、蓬萊、瀛州を不老不死國として、夢のごとき憧憬をもつのも、あるひは崑崙山中の桃源鄉に西王母の生活に淡いあこがれ心を抱くのも、要するに彼等支那民族が、遊惰安佚を唯一の享樂とする個人主義的思想の反映であると見るべきであらう。所詮、漢民族はあくことを知らぬ、安佚、享樂の偉大な追求者であるといふに歸着するやうである。

かうした漢民族への、性格解剖は、彼等にとりて決して祝福さるべきものでない。けれどもそれが彼等の事實なのである。何といふ氣の毒の彼等の事實であることよ。

かくのごとき安佚、享樂の偉大な追求者であるところの漢民族は自己保存のためには、あらゆる微妙にして複雜な性格をもつようになり、それが全く理想的な境地にまで訓練されてゐるのである。すなはち二つの全く矛盾した性格を少しの破綻もなく同時に一身に縫合してゐるのである。個人としてはもつとも信ずべき性質を有しながら、その半面にはもつとも油斷のなり難い變幻きはまりなき生活行動を敢てするのである。支那歷史はかうした漢民族の、相矛盾する性格の錯綜によりて織りなされた民族の悲劇史であるといつてよい。

これを要するに彼等漢民族が、自主的でなく、あくまでも享樂、廢頽の個人的思想に徹底してゐるところに民族の悲劇がある。これは廣漠無限の支那の大地に壓倒され征服された自然への驚歎者の陷るべき當然のワナなのである。

砂中の寶庫

黃河が遠くその激流を、崑崙山脈に發するについて、支那では昔から一種の深い神祕的な憧憬を、その山に持ち傳へて來た。ことに崑崙山からは玉石が出るといふので一層强いあこがれを刺

激した。管子には『北には禹氏の玉を用ひ南は江漢の珠を貴ぶ』といふ記事があり、支那の西北地方が、有力な夷狄の戍地であるとともに、有名な玉の產地として傳へられてゐる。

天山南路一帶の地は、古來、玉の產地として早くから支那に知られてゐた。すなはち和闐河の流れの一を玉隴哈什河といひ、他の一を喀喇哈什河といふ。前者は白玉河の義、後者は黑玉河の義である。南山から玉がこの河筋に流出するからである。和闐河はやがて塔利木河となるが、タリム河はトルコ語のカジュの義で、玉を意味し梁書には玉河と記してゐるのがそれである。

崑崙山は崑岡ともいはれ『火崑岡に燃ゆれば玉石俱に焚く』などといふ古詩もある。崑崙山に山火事があると、玉石が一緒に焚かれるといふのであるから、いかに支那の西北地方が古來、寶玉類の產出に富むでゐるかゞ分るであらう。土地があまり邊彊で、交通不便のために、この地方の事情はあまり詳しく知られてゐないけれども往時は西域諸國を經て、インドに通じ、ギリシヤローマにも交通してゐた唯一の文明交通路であつた。何しろ土地は高原で、太陽は燦々として熱砂を射、空氣は乾燥して漠々たる砂原であるから、金銀寶玉はそのまゝ燦然たる光を砂原の中に放つてゐるのであらう。これが新彊省の奧地における一大富源をなしてゐるのである。

今度、わが勢力範圍に入つた內蒙綏遠から遙かに西をのぞめば、寧夏、蘭州は指呼の間にあるわれら日本人にとつて、甘肅、新彊の探險はモハヤ夢ではなくなつた、玄奘の西域記に書かれた地方も、法顯傳にあらはれた一千五百年前の旅行記を跡づけることも不可能ではなくなつた。そこには夢の傳說である桃源鄉が、夢でなくして現實に存在してゐるかも知れない、少くともそこには近代人を誘惑する金銀珠玉の一大寶庫が、今にも砂中に埋もれてゐるであらうと想像する。

私は先年、旅順の博物館で、大谷光瑞師の中央アジア探險によつて發掘したミイラの二體をみたことがある。大谷師のミイラ發掘は十一體におよぶさうであるが、そこに展觀されるのは高昌國の貴人夫婦二體であつた。高昌國和卓のそのミイラは高貴な綾羅を纏ひ、その服裝および裝飾品は善美を極めたもので、西域諸國の文明が相當程度に高いものをもつてゐることが想像されたこれらの西域文明は今日では流砂の底に埋もれてゐる、それらを發掘することは學問上の大きな

貢献をなすであらうが、それよりも直接にこの地方の金銀珠玉を掘り出すことは、愉快な産業上の壯觀であるであらう。私はそれを試みるものが、われ等日本人の中から續々出て來たらんことを望むものである。それは必らずしも一片の空しい夢ではないと私には考へられる。

全体、金銀珠玉のごとき財寶の豐富なところから、その文明は發展するのである。然るに支那の文化はまづ黄河上流の陝西、甘肅地方から發展した。それは支那西北地方の豐富な物質的財貨を支配したからである。秦始皇は今日の西安附近にその宮室を營むで天下に號令したものであるが、今日では人文地理上の邊疆に過ぎない西安地方が、どうしてその昔、秦始皇帝時代には支那文化の中心であつたであらうか。それは西安が支那の西北方に對する一大交通貿易路を押へて、天下の富を掌握してゐたからであらう。北京、南京、天津、上海の如き海に近い都市の生れない時代には、陸上の大陸交通路に當るところに天下の富が集中したのである。

濟南附近

支那から、陸路、中央アジアを經て、印度および歐洲に通ずるには、天山南北路を經なければならぬ。沙門法顯は一千五百年前、天山路を經てインドに至り、海路支那に歸つて來たが、玄奘三藏は一千二百年前、陸路印度に入り、そして陸路支那に歸つて來た。佛教の經典が古來、何百年間にわたつて支那に入つてきた經路は、多く陸路によるものであつた。西域諸國を仲介として印度の佛教は滔々として、支那に流入した。すなはち支那が外來文化をうけ入る文明の交通路は今日の甘肅、新疆青海諸省より以西の地方に開けてゐたのである。從つて支那の西北地方は、支那文明の搖籃地であつた。これらの地方は、今日では全く支那の田舍になつてしまつたが、これは海上よりする交通路が開けて以來の變化であつて、それ以前には西方文明は陸路、流砂を越えて支那に入つて來たものなのである。

從つて西方文化を逸早く輸入し得る長安が長い間、支那の帝都であり、支那文明の中心であつ

たことも首肯されるわけてある。秦はCiun で、支那といふコトバは秦から轉化したのだといはれるほどに、秦は有力な地位を歴史に占めてゐる。それは秦が支那の西方にあつて、西方文明をもつとも早く輸入し得て、他の諸國を壓することができたからてある。それが後代になると、漸次黄河の下流に文明の中心が移動して行つた。

孔子は二千年前、曲阜に生れたその曲阜は濟南から汽車で四、五時間程の南方にある一小都會てある。濟南は昔の齊の都てあり、曲阜は昔の魯の都てある。この齊魯の古都てあるところの濟南も曲阜もすでにわが皇軍の占領するところとなり、曲阜の孔子廟には日章旗が飜つてゐる。孔子も『齊一變せば魯に至らん、魯一變せば道に至らん』と論語で説いてゐる通り齊魯の文化は支那において理想的に發達してゐたもので、いふところの黄河文明は、古來山東省において最高頂を示してゐたものてある。

魚釣りて有名な太公望は、齊に仕へるまては、毎日、黄河の水邊でのらくらと魚つりばかりしてゐたので、その釣り場といふのが、濟南郊外の黒虎泉だといはれる。濟南城の高い城壁の下を美しい水が湧き上るやうに溢れてゐる。この邊は、支那にしては珍らしい水の清いところて、濟南地方は黄河の河底よりも、ずつと低いので從つて黄河を流れる水流は黄色に濁つてゐるが、この地下水は地底を漉して湧いてる關係上、水が美しい。太公望はソンなキレイな水邊で、景色のよいところて魚を釣つてゐたと見える。

さらに太公望よりも、ずつと古い時代の禹は、やはり黄河の治水のために苦勞したのも、この濟南附近てあつた。禹が治水のために傾けた努力は實にスバラシイもので『家門をすぐれども入らず』といふ懸命ぶりて、九年間も治水に沒頭した。だから今でも禹の功勞を偲むて、『禹城』だの、禹州だのその他禹を稱する地名が、このわたりに多い。

濟南の郊外にある歴山といふ山は、支那における第一の帝王として有名な舜が、一農夫の時代に、その麓でコツ〳〵と百姓をやつてゐたといふのて有名な山である。かくのごとく濟南地方の

黄河流域は孔子のいはゆる齊魯文明の中心地で、一轉すれば『道に至らん』とまで讃美した地方なのである。

これらの黄河流域に、今、新らしい文化の黎明があけ始めやうとしてゐるのである。すなはち支那事變によつて、これらの地方が、わが軍に辟き伏して、こゝに新文化の誕生を見ようとしてゐるのである。

井戸中心的社會

支那の性格解剖を試みて、私は彼等の個人主義的享樂生活の追及慾をあげた。これは支那のごとき廣漠無限の大地に住むものが、大地の偉大さに壓倒されて、絶望感を滿喫した結果の反映であると結論した。

しかし問題は、それから發生して來るのである。支那にありてはこの個人主義的享樂生活の追及がそれだけに止まつてゐないで、それを充足發展せしめる慾望によつて、この性格の上に、さらに他の一つの重要な性格を積重ねることになつた。

それが支那の堅實性である。

われ〳〵は個人の慾望を充足させるためには、それにもつとも都合のよい、ある個人以上の力に結びついて行かうとする傾向がある。すなはち個々の個人が、個々的に共同してゆく場合と、絶大な國家權力の保護の下に、個々人が共同してゆく場合と、この二つである。

前者は『社會』となり、後者は『國家』となる。しかるに支那はあくまで個人主義的思想性格の所有者達であるが故に、その共同性が『社會』として發達していつたが、『國家』といふ形態において結合することを忘却した。

支那が『社會』であつて、『國家』でないといはれる所以はそこにある。彼等は民族的性格そのものゝ性質上、どうしても『國家』結合の方へは向かないで、『社會』組成の方向へと歩いていつた。これは彼等が、徹底的に個人主義的自由主義者であるからである。すなはち支那には社會があつて、國家がない。

彼らが、たとひどんな國家形態で、統治的なシゴトをするにもせよ、それは國家結合でなくして、社會組成の基礎觀念の上にチャンと乘つてゐる。だから支那の政府は、どの政府も、ほんとうの意味での政府ではない。政府と稱し、國家と稱するものは、彼等の自由意思を抑壓する機關で、彼らにとりては苛烈の惡存在でしかない。それゆゑに彼らは、いかなる政府に對しても好感を有しない。必らず政府を否定し、拒否し厄介がり、敬遠する。つまり支那では國家といふものは、民衆にとつて『厄介なる存在』になつてしまふのである。

彼らはさうした國家の代りに、自分等だけで、氣に入つたところの『社會』を構成して、その中でみんなが平等な自由さと、享樂と利慾とを、めい〳〵で滿足させようとする。だから支那では『社會』が、もつとも理想的に堅實な發展をとげて來た。

一つの井戸を掘つて、まづ飲料水を得ることに努力する。水の惡い支那では、井戸を掘ることが生活の第一歩であり、生存の單位である。その井戸は個人が一人きりで獨占するにはあまりに高價である。そこで、井戸のあるところ、必ず共同がある。

まづ一つの井戸を掘つて、それを中心として四方に道路をつくるのである。この四本の道路に沿うてそれ〴〵住宅をもつ。すなはち一個の井戸を中心として、その周圍に八戸の住宅が出來る。これが支那生活の單位となるのである。

一つの部落には、かくして東西南北に四ツの井戸が掘られ、それにはそれ〴〵八戸づゝの住宅があつまるわけである。總計三十二戸の住宅があつまつてそこには四井が出來る。その四井を中心としてあつまつた三十二戸の住宅と、その住民とで一つの部落が成立する。これを邑と稱する邑はわが國のムラである。この部落のぐるりを土塀をもつて正方形に、あるひは長方形に取り圍む。一部落はかくして同じ平等な權利と、平等な自由とで、共同的生活をいとなむ。それが支那の社會における生活單位である。これを四井の制度と稱し、支那では四千年前の周の時代から、成法の制度として成立してゐる。部落單位の社會はかくして發達して行つた。

支那は國家に非らず

井戸を中心として發展して行つた支那の社會共同觀念は、ヤハリ同じ形で、農耕生活の中へ延びて行つたのが、井田法なるものである。

井田法とは、ある一定の耕地面積を井といふ文字の形で均分すると、そこに九個の同一面積が出來あがる。それを八家の部落民、すなはち一個の井戸を中心として生活するところの八家の共同住民が耕作しその中心に殘された一つの耕地を共同耕作して、それから收穫する作物を、租稅として政府に納める。これを井田法と稱するのである。これが周代に確立された農耕法である。

一つの井戸を飲料水として生活する八家の共同生活と、八家の耕作による農耕地の中心に、一個の共同耕地をもちながら、そこから生れる作物を租稅として上納する農民の共同生活、それが支那の個人主義的性格の上に、共同社會の生活觀念を植ゑつけて來た。

この四井の制度と、井田法と、いづれも八家の單位として組成されてゐる。『井をほりて飲み田を耕やして食ふ、帝力吾において何かあらんや』といふ支那農民社會の觀念が、そこから發生したのである。

これが支那における理想社會のなのである。

『帝力吾において何かあらんや』といふのは、必ずしも支那の農民が、帝力を否定したわけではない。むしろ彼等はしらず〳〵の間に國家の法律に從ひ、喜んで帝則に從ふことを理想としたその境地をかく唄つたものである。彼等が井を掘つて飲み、田を耕やして食ふてゐるうちに、自然にお上に對する租稅としての生產物をも上納することが出來るのを滿足とし、すなはち『日出て耕やし、日入つて休む』といふ農耕生活の努力が圓滿に運ばれてゆく狀態をもつとも理想であるとして讃美したものなのである。

これは支那における政治は、法律つくめで人民を强制的に束縛することを非とし、しらず〳〵帝則に從ふことを理想の政治であるとし、古來何千年間かに亘つて、これを人民が禮讃して來た『おもかげ』が、これらの制度の上に表はれてゐるのだと、私は見るのである。今日の支那の農民社會や、部落構成の方則が、かうした四井法や、井田法によつてゐるといふのではない。かう

した部落社會の構成法は、もうすでに何千年前から崩れて行つてしまつて、たゞその『面影』に過ぎないと思はれるものが、ところ〴〵に見出されるといふだけで、これは隨分、遠い昔の夢になつてしまつてゐる。

だが、支那の個人主義的自由思想と、それを土臺として發達して來た部落の共同社會觀念との根つよい發展經路をたどつて見ると、なか〳〵に長い歴史をもつてゐることが分ると思ふ。

かくのごとく支那の民族的性格の中には、どこにも強い國家といふ意識觀念を見出すことができない。たま〳〵起伏するところの歴代の國家形態なるものは、支那民族を誅求するところの搾取機關であつて、彼らの理想とする國家ではない。かうした支那の國情の中では、つひに強力なる統一的中央政府なるものが、支那人の心の要求から出現するといふことは、とうてい望めないことなのである。

いひかふれば支那には、ほんとうの意味での國家は成立し難いのである。人民のための政府などといふ觀念は、支那人の性格中には存在し難いのである。從つて蔣介石の國民政府といつて見たところで、もとより支那民族の心から希望し信賴する政府ではない。長い眼でもつて、支那歴史を通觀するとき、私は支那には政府と稱すべきものは生れ得ないと結論するのである。

共同理想の起原

四井と井田と、この二つが、支那の農民部落に共同社會を結成させることを教へた。しかしこれは周の時代に、この制度が創始されたのではなく、さらにずつと太古の黄帝時代に、その淵源をもつてゐる。

こゝで注意すべきことは、四井と井田に伴ふて、つねにそれには、八戸の共同農民が、單位になつてゐるといふ事實である。八戸の共同生活群によつて一つの井戸が利用せられ、八戸の共同農民によつて耕作されてゐるといふ事實である。すなはち支那にありては共同社會の單位が『八』戸であることである。しからばナゼ『八』といふ數字が生れてきたか。そのは一つの井戸を中心として、東西南北の四方に四本の道を正しく開いたからである。四本の道路には當然その兩側に

沿うて八邊に住家ができる。そこから『八』戸の數が生れてくるのである。

これが都市建設のプランにも、ヤハリ基本的な觀念となつて、それがいはゆる四通八達をなしてゐる。すなはち都市の繁華な中心に立つてその道路を見渡すと、支那の市街は規則正しい四本の道路が延びてゐるのである。これが『四通』である。さらにその四本の道路には、當然その兩邊に市民の住宅が展開される。それが『八達』である。四通するが故に八達するので、これは支那にありては單なる繁華を形容するコトバでなく、事實なのである。

だから四通八達といふコトバは道路が四本あつたり、八本あつたりするのではない。道路は中央から四本出てゐるだけなのである。その四本の道を辿れば、兩側八邊の住宅に達する。これが支那の都市建設のプランである。すなはち支那の都市は、井戸を中心として發展して來た支那の共同部落社會を、そのまゝの單位で、無數にあつめ重ねて行つたもので、てうど重箱を積重ねたやうな正確さで發展してゐる。土木建設の方ではこれをどういふコトバで呼ぶかを知らないが、支那の都市は井條法的に、規則正しい條里をもつて建設されてゐるのである。

わが日本にありても、古來この支那の都市建設法も模倣して、正確な規則正しい井條法的條里をもつて都市を建設して來た。奈良がそれであり、京都がそれである。奈良以前の藤原京においても、この支那式井條法の都市建設が實現されてゐる。とにかく支那に發達したところの都市計畫が、現在、街衢においても、そのおもかげを發見することが出來る。かうした都市建設を名古屋市ではゴバンワリと稱してゐるやうである。このゴバンワリの都市建設プランは、支那では『八戸』を單位とする共同生活の實踐からはじまつて來た。

これを文字について見るに、『共』といふ文字は、『共』と『八』との合成文字である。共同觀念が井戸からはじまり、その共同單位が八戸であることを漢字の『共』がそのまゝ表現してゐるのである。これまことに興味深いことと思はれる。

元來、支那人はノンキな、樂觀的な民族であるにかゝはらず、かうした部落の構成や都市の建

設になるときはめて規則正しく、そしてそれが『四』とか、『八』とかの數字のクミアハセをしつかりとやらうとするところがある。さうした點はきはめて形式にこだわるクセがある。たとへば毛晃といふ人の說によれば『四井を邑となし。四邑を丘となす。邑は方二里、丘は方四里』とある。支那の一里は日本の六町であるから、一部落の單位『邑』は十二町四方で、（丘）は二十四町四方の正四角形な部落となる。この正四角形的な部落をつくることが支那人のクセである。

支那の部落構成

項安世といふ學者の說によると『四井をもつて邑となす。凡そ三十六家なり、公田四を除けば夫れ凡そ井二家なり』といつてゐる、さきにもいふが如く一井に八戸であるから、四井では三十二戸となるべきであるのに、項安世は公田四戸を加へて三十六家としてゐるのである。公田とは井田法による共同耕作地のことで、その生產物を公納するがゆゑに公田とよばれる。かくのごとく四井には三十二戸說と、三十六戸說とがあるが一邑の面積はこの一邊を十二町とするのであるから、一井の面積は日本の六町四方である。六町四方の面積地內に八戸の家族が生活するのであるから、一戸あたりの宅地および耕作面積四町五反歩となる。その中から公田を除けば一戸當り四町歩となる。この四町歩の中に住宅と耕地とをもつ。これが支那の農民生活の經濟單位である

日本で一里は三十六町であるが支那の一里は六町である。支那の一里六町の制度が日本に輸入されるに當つて、面積と延長とをとりちがへて混亂したがために一里が六町であるべきのに、いつのまにか三十六町になつてしまつた。元來、里とは邑と同じく、一定の平面地域を意味し、それは支那にあつては六町四方のことをさすのである。それを六六三十六町歩として面積を算出したのを、いつのまにか距離計算の方に轉用されて一里を三十六町としてしまつたのである。さうした錯誤が訂正されずにわが國ではそのまゝ一里を三十六町としてしまつた。もしこの條里計算の方法を、支那から輸入する場合に、マチガヒを生じなければ、今日でも日本の一里は支那と同樣に六町であつたであらう。

しかしこんなことは一つの計算の形式であるから、一里が支那のごとく六町であつても、日本のごとく三十六町であつても、どちらでも差支へがない。だが、面積を距離と混同した錯誤は、飜譯移入の場合のマチガヒて、隨分最初は滑稽なものであつたらうと思ふ。

この四井には、井戸から汲み上げた水を汲み流す溝がある。溝の廣さは四尺、深さが四尺である。この正方形の溝は、井戸水の多寡をはかるための溝であつて、水を汲み溜める池の作用をなすものらしい。水の豐富に出る井戸と、さうでない井戸とがあつて、これを計量することは生活上の第一要件であるから、從つてキチンとした一定量の溝を造つて、水量の多寡を量ることに供したものである。この四井各八戸の配置といひ、溝の深さ四尺、廣さ四尺といひ、道路の四通八達といひ、支那人が四と『八』との數字構成で、生活を押し通してゆく形式ずきな趣味はのんきな支那人に似合はぬところがある。

わが國でも、奈良朝時代には、支那文明の輸入に終始したもので何から何まで、支那を見習つた。さうして支那の部落單位である『邑』の代りに『里』を部落單位とした。しかし支那では一部落を三十二戸または三十六戸としてゐるが、日本では一部落を五十戸單位とし、これを里と稱へしものである。今日でも飛彈の下呂温泉から奥へかけて、中呂、上呂などといふ村が續いてゐるが、これは大抵五十戸一村落、すなはち五十戸一里で、この街道筋に展開してゐたものである。今も田舍に行くと五十町一里で計算するものゝあるのは、奈良朝時代の一里（一村落）五十戸單位の制度が、距離計算の上に混在してゐるのであらうと思ふ。

老子の「無爲」哲學

支那における共同社會の思想は同じ井戸の水を飲み、同じ農耕地を耕作するところから發展して來たことは、上に說くところの如くである。

それが彼等の個人思想と、自由思想とに根ざし、そこから發展して來たことも、すでに說いたところで明かであらう。

かくして發展して來た支那の思想の中には强制的な、神權的な、高壓的な國家思想といふもの

が、發生しようにも發生すべき餘地がない。

支那はこの意味で國家でなくして、『社會』である。古往今來、支那には國家といふものがなかつた。もちろん、現在でもその通りである。この事實をハッキリ認識した上で、支那といふものを考へないと、支那が何ゆゑに國家として鞏固になり得ないかの理由を理解することができない。

支那人にいはせると、日本は支那から、あらゆるものを學んだ。陶器、繪畫、絹、漆器、書道銅貨、障子、提灯、花火、禪の哲學、宋の哲學、儒教的君主政治、唐詩、喫茶の法、清水の味ひ方、花の栽培法、亭、庭園など、これらは悉く日本が支那から學んだものである。しかし唯一つ支那の教へ得ぬ、そしてまた、日本人の取り入れることの出來なかつたものがある。これは道教の哲學である。神祕的な道教の『無爲』の哲學である。

その通りである。われ〳〵日本人はどうしても『無爲』の哲學だけは理解し得ないし、支那にはたゞ一つの『無爲』の哲學だけを、保存してゐるのだ。日本と支那との民族的性格の相違は、支那人が『無爲』に徹してゐるのに、日本民族はつひに『無爲』の味ひを味得することのできない點にある。

しかしわれ〳〵は『老子』のこの哲學を理解し得なかつたことをわれ〳〵民族のために、心から祝福したい。元來この『老子』の哲學を味得、体達するに適する支那人は、ノンキな個人のあつまりの民族として今日までやつて來たが、それの味はひの分らない日本民族は、ユーモアのない窮屈な生活の底から、完全主義、全体主義の國家生活に徹底することが出來た。

日本には哲學がない。日本民族は哲學するに適しない民族である。從つて老子の『無爲』の哲學の分らない民族なのである。蓋し、哲學は個人主義の世界に生れ、自由主義思想の温床の上に生育する。支那に哲學があるのは、彼等の個人主義と自由主義に依存してゐるからである。日本に哲學がないのは、全体主義と完全主義との道德的實踐の嚴しいいましめの中に、沒我的献身に訓練されて來たがためである。哲學するものは行動しない。哲學なきものは實踐する。今日のわ

れ〳〵は行動主義の理論の下にのみ、はじめてほんとうの生甲斐を感ずる。

老子は彼自身は、すぐれた學者であり、その掌ごるシゴトは、今日の圖書館司書といふがごとき職務にあつて、その一代を書籍の整理に沒頭したほどの學者であつたが、しかし彼は『學』することに反對した。學問すれば智惠が出來る。智惠が出來れば分別がつく。そして次第に自然にそむくの結果となる。そこで老子は學問を否定した。彼が學問を否定することは聰明と叡智とを否定することである。心意の活潑なる躍動を否定することである。即ちノンキに、のむびりと人生を享樂するためには學問を排斥せざるべからずとしたのである。これは支那の民族性そのもの、本質に迎合するところの甘い、よろこびの哲學である。老子の哲學は國家などは必要としない哲學なのである。これが支那人に受容れられて、今日もなほ偉大な力を有つてゐる。

孔子と老子

老子の『無爲』の哲學は、支那民族の性格に根ざすところの本質的な要求に觸れた哲學であるその無爲の甘味は、アヘンの吸飲によりて感得する甘美な陶醉と同じ性質のものである。そこには何等人生の努力も、生活の苦鬪をも課さない柔かい法悅の甘さがある。老子の道教はその點でもつとも支那的な香り高い思想的アヘンなのである。これが支那人に歡迎されぬはずがない。かくして現在、滔々として支那人を風靡する宗教は、老子にその源流をもつところの道教である。

これに反して、支那には孔子の儒教がある。老子の道教は、あまりにそれが支那的であるがためにその老子教は支那の國內だけにモテ囃されるに止つたが、孔子の儒教は、その教へが積極的な人生方面を昂揚鼓舞するがために、廣く東洋諸國の倫理道德の指導原理として、廣い範圍にその信奉者をもつに至つた。この點で孔子の儒教は世界性をもつてゐるが、老子の道教は特別な支那人の教へとしての孤立性しかもつてゐない。

私はこゝで老子教と孔子教との比較判斷をやるつもりはない、この二つの取捨選擇を讀者に强制するつもりもない。たゞ老子教は支那人の個人主義的な享樂生活に阿ねる哲學であり、孔子教

は人間的な生活に、嚴しい努力反省のいましめを課しようとする人生の哲學であるといふ事實を述ぶればそれでよい。そしてわれ〳〵日本民族は、老子の無爲の哲學を永久に理解し得なかつたことを、われ〳〵日本民族のためにふかく喜ぶものだといへば足りるのである。日本と支那との民族的性格の差違は、思ふにこゝにある。

すなはち努力、發奮、自省の日本民族と、虛無、無爲、安佚の支那民族と、それが孔子教に傾倒する日本民族と、老子教を禮讃する支那民族との相違である。老子は學問を排斥し、孔子は學問を第一とする、老子は安佚、遊惰をすゝめ、孔子は努力、發奮を奬める。もちろんこの相反した二つの性格が、支那民族の中に縺れ合つて殘存してゐるのであるが、自然の傾向に委せて置けは、人間はとめ度もなく遊惰、安佚の生活に墮在する。從つて支那人は一般的にノンキで、樂觀的で、生活の意思を缺いてゐる。哀れむべき存在なのである。

私は以上、綿々として支那民族の性格について、その特色と思はれる諸點を說いて來た。その目的は要するに『支那は國家にあらず』といふ私の持說を說明するためなのである。支那では如何なる政府も國民の心からなる贊同を得ないもので、彼等民衆は國家や、政府の存在などにかゝはつてはゐない。そんなものは彼等にとりて厄介千萬な、ごうでもよい存在なのだといふことを力說したかつたのである。漢民族の民族的性格そのものゝ中に、國家的な觀念などは存在してゐないのだ、だから支那で統一政府の完成することは永久に希望されないことなのだ。黃河の水は百年待つても決して淸澄しないやうに支那では中央政府の統一完成は百年河淸をまつが如きものなのである。

だから蔣介石の南京政府が、今日まで支那の統一政府であつたのも、實体のよいカケゴエだけのもので、排日政策でも呼號してゐなければ、とうくに內部から崩壞してゐたものに過ぎないのである。それが排日政策のおかげで今日まで維持されて來た。それを今度の事變で徹底的に叩きのめすことになつたのであるから、事後のいかなる支那政權も、ほんとうな統一支配力をもつことは出來まい。それが支那の本質なのである。この支那民族の性格を本質的にのみこんで置かね

ば、われ〳〵は今後の支那を處理することに失敗するであらう。その對策としての基本觀念をわれ〳〵がもつためには、以上のことを知つて置かねばならないと私は信じたのである。

民族性格の改造

支那が國家でなくて、社會であるといふ事實は、蔣介石の國民政府を否定するための基礎理論となるばかりでなく、これから勃興しようとする新興政權の運命についても、充當さるべき基礎理論となるであらう。そこでわが國の支那再建の工作には、根本問題としての支那民族性の性格改造に關する教育問題が先行しなければならない。これは四千年の支那歴史を改造しようとする永遠な大事業である。これをなしとげなければ、永久に日支親善は完成されたといはれぬ。

まづ支那人を、その個人主義的な、享樂生活から百八十度の大轉回をなさしめて、全体主義的な努力生活に訓練づけるためには、今一度、失はれた孔子教の復興に力を入れなければならぬ、そして具体的な政策としては、ヤハリ支那全土に亙つて、治水と植林との永久の事業を逐次實行するの必要があらう。これは黄河の水を清澄ならしめる方法である。黄塵萬丈の支那から黄塵を驅逐する方法でもある。廣漠無限の大地から新らしい活力を生みだすといふ問題で、決して絶望すべきものではない。支那人の個人主義的消極性に委せて置くからこそ支那の大地はます〳〵荒廢するのである。治水と植林、これこそ支那民族性格改造の二大事業として實行の可能性を有する問題ではないかと考へる。

日本はすでに三十有餘年の苦心と努力によつて、朝鮮半島の禿山を退治して、今や鬱々たる森林をもつて半島を蔽ふに至つた。滿洲國の荒野も、今、二三十年のうちには、日本人の手によつて、見ちがへるやうに美しいみどりの平野と化するであらう。北支も内蒙も日本人の發展するところ、平和なるミドリの國土を築きあげるのに何の困難があらうか。私は『百年河清を待つが如し』といふ支那のコトワザは、無爲にして何等の努力を試みない支那人にとりてこそ眞理であると思ふが、われ〳〵日本人の行くところ、日本人の經營苦心するところ、支那の大地を改め、その荒廢を救ひ、林相を改め河水を清澄ならしめること位は何でもないことゝ思ふのである。もし

支那が忠實に、日本に依賴し、日本の忠言に聞くならば、百年を待たずして、支那の濁流は清澄なる水流となるであらう事を信ずる。

東洋永遠の平和のためには、日滿支三國が心から協力一致していかねばならない。しかるに不幸にして、國民政府はその政策を過つた。蔣介石は眞に支那を救ふ方法を過つたのである。彼の多年にわたる執拗な排日教育と、抗日政策とは、遂に何ものをも彼に與へることが出來ないばかりか、支那四億の民衆を徒らに塗炭の苦しみに喘がしめたに過ぎないのであつた。蔣介石は今度の支那事變による支那の混亂、損耗をもつて、支那五千年の歴史中、かつて見ざる最大なものであると歎息してゐる。しかしさうした打擊をうけるに至るべき原因を造つたものは、蔣介石自身ではないか。

この意味で、支那の更生のためには、『ある一定の地區に非武裝地帶を設ける』といふわが日本政府のモクロミは、何よりも必要である。モトより支那全土を非武裝地帶とすることがさらに必要であると思はれ、そこまで徹底することを理想とするが、これは抗日政權を徹底的に叩き潰した後のことで、今のところは北支に非武裝地帶を設け、黃河流域一帶の支那に特殊の機構をもつて政治するといふことが、さしあたりの急務であるやうに思はれる。そしてこれが現に目下、着々と進行中なのである。

支那は昔から異種族の侵入をうけて、かつてこれと戰ふて勝つたことがない。戰敗が彼等の運命であつた。近いところでは、蒙古から侵略されれば蒙古に敗れ、清朝が北方より侵略すれば清朝に征服されてゐる。從つて異種族、異民族との鬪爭において、戰敗し、征服されても、尙かつみづから生存するの道を講じて來た、これが彼等の社會共同生活なのである。從つて彼等は國家として完成統一する代りに個人として、社會として自からを生きることに成功した。てうど大きな船体の構造を、小さく仕切ることによつて、たとへ船底に浸水しても浸水はその一部分だけで全体の沈沒を免がれるようになつてゐるが、支那の國家組織はこの船体構造と同樣である。支那は國家でなくて社會であるといふ理由はこゝにある。

唐代胡人像

滿洲國々立博物館が、奉天にある。二、三年前に新築されたところの、大理石造りの堂々たる建築物である。私はすでに何回か、そこを訪れて、それらの陳列品を通じて、支那民族を理解しようとつとめてきた。そこには羅振玉君の寄託する貴重なコレクションが、一室に陳列されてゐて、つねに私の心をひくものがある。それは古墳から發掘したところの古代の人形で、大抵、唐俑と稱するものである。私はその中にある幾點かの胡人像にふかい興味を感ずる。

私は、また天津で唐三彩胡人騎馬像と、私の名づけたところの人形を買つた。これはモトより贋造品で、ホンモノではないが、それでも私の興味をひくに十分であつた。これらの唐代古俑の中には、數々の男女の胡人像がある。その胡人の中の男子は蒙古人でもなく、滿洲人でもなく、匈奴でもない、今日の西洋人に見るがやうな鼻梁骨の高く通つて、眼窩の落ち窪んだ、頰骨の低い、そしてアゴヒゲのぼう〳〵と生えたところは、全くギリシヤ人か、ローマ人を見るやうな感

じである。秦始皇時代には支那周圍の胡種百餘國と數へてゐるが、それらの中には今日の西洋人と同一なタイプの人種が支那に入りこんでゐたことが分るのである。羅振玉のコレクションの中には函谷關あたりで發掘したそれらの鼻の高い胡人像の存在するのを見れば、支那人の西北方から、さうしたヨーロッパ人が、紀元前にすでに支那內地ふかく入りこんでゐたことが想像せられるのである。

朝鮮京城の博物館や、總督府博物館にも、西域諸國の古俑の一部が集藏されてゐる、それらの古俑の中には白哲人種型に屬する滑らかな皮膚と、高い鼻と、秀麗な頰とをもつたのが多い。これは漢民族でもなく、蒙古人でもなく、全くアリアン型の人物である。胡種の婦人が騎馬で、皮袋を頭にかぶつて防寒用の帽子としてゐるのなども、私には珍らしい。これらの古い人形は、支那大陸の住民が、いろ〳〵に錯雜してゐて、あるひは爭ひ、あるひは和協しつゝ過ごして行つた人類歷史のおもかげを私に想像せしめる。

皮ヒモのバンドで、外套の上をきゆつと締めたのや、皮の長靴を穿き、長劍を横たへた颯爽たる武人像などをみると、今日のわれ〳〵が到るところでみる皮帶の生活が、すでに二千年も昔から、支那の北地の寒い地方で常用されてゐたことが分るのである。日本の古い寺院に祭つてゐる四天王像におけるいかめしい軍裝が、支那固有の服裝ではなくて、もつと奥地のいはゆる胡種に屬する塞外民族の軍裝ではないかとも考へられるのである。

かうした斷片的な知識で、ものごとを概括して、ある結論に到達することは、もとより危險千萬ではあるが、私は以上のさま〴〵な材料によつて支那はいつも塞外胡種の異民族に壓迫せられそれに征服せられ、それらの苦難の生活を通じて、今日にいたつたのだといふことをいひたいのである。これを一言にして悉せば、漢民種はその五千年の歴史を通じてつねに西北方および東北方よりする侵略に對して、つねに受動的な地位に立たされて來た。そしてそれら外來の武力的勢力に對しては、つねに壓倒されてばかりゐたのである。支那が民族の性格としては消極的でありぼ禦的であり、自己自身を保身する外には、積極的にあり得なかつたのも、これら外來の武力に抵抗し得ない弱さのためであると思はれるのである。このことは現在にありても同樣である。この故に支那のある地域を、非武裝地帶にするといふわが國の提案は、支那の得意ならざる武力抗爭をやめて、その得意とする自己保存の平和的生活を彼らに保障することにもなると考へられる。

中原の鹿

南北支那をどこで區別するかについては、種々の議論はあらう。北支五省といつても、從來區々として一定してゐなかつた。北支六省といひ、あるひは北支七省、八省などといふものもあるが。こゝでは昭和十年の北支工作着手以來北支五省とは河北、山東、山西、察哈爾、綏遠の五省といふ觀念にほゞ一定して來てゐる。大体において黄河流域を中心として、それ以上の地域だと見ればよい。

もし地理的に、カンタンにいふならば、南北支那は秦嶺山脈を境界線とゝして、それ以北を北支、それ以南を南支と概稱してもよい。

崑崙山脈の東部に、それから派生する支脈が、東西の方向に並行的に連互する山地をなしてゐる。その一脈が東へ直線にのびてゐるのが秦嶺である。その秦嶺の餘派がさらに東にのびて伏牛山脈および淮山脈となり、こゝに大体、東西に一貫する山脈を引いてゐる。その北が黄河流域でその南が揚子江流域である。

支那の歴史は、大体において政治的にも、經濟的にも、社會的にも、南北二つに分裂するのであるが、その分裂の境界線は、つねにこの境界線によつてゐる。そして私のこゝにいふ『黄河』を中心とする北支那において、わが政治的、經濟的、文化的な指導權が次第に確立されて行くのであるから、われ〳〵は黄河文明新建設の前途を注目するの必要がある。

いふまでもなく、北支那の地形を特色づけるものは黄土である。地理學者の說によると北支那の黄土は、その厚さ千五百呎より二千呎におよび、山の斜面では八千呎から一萬二千呎に達するといふ。リヒトホーヘンその他の地理學者は、支那のこの黄土は、風によつて運ばれた塵埃の堆積したものだと主張し、今では大体、この風成說が一般に認められてゐるのである。

北支五省の總面積は二十五萬八千八百十五平方キロと稱せられ、こゝに八千九百五十五萬五千四百九十四人の人口を有つてゐる。もちろん、この統計數字は支那のことであるから信賴するわけにはいかないが、大体北支五省約一億と總稱してよいであらう。人口の密度は河北省においてもつとも高く、一方キロ二百七十七人、山東省はこれについて二百二十四人におよび、いづれもわが國内人口密度百八十一人にくらべて遙かに多い。しかし察哈爾省は一方キロ八人、綏遠にいたつては七人に過ぎない。

支那では、古來『中原の鹿を追ふ』といひ、中原を支配するものは支那を支配することができた。その中原といふのは、南は河南省の伏牛山脈より、北の方恒山々脈におよび、西は山西省の太行山脈から、東は山東省の泰山々系までの間で南北六百マイル、東西百五十マイル總面積約二十萬方マイルにわたる黄河流域の大平原をいふのである。こゝに古來、支那の英雄豪傑がその覇を爭ふて、全支を支配せんとしたもので、その中原の舞臺が、實にわが黄河であつたのである。

今やわが皇軍は、黄河を中心として、頑冥なる抗日軍を撃滅掃蕩するために、東西南北から次第に、敵軍を掩有するの大形をとつて進むでゐる。そしてわが無敵皇軍は秦嶺を越え函谷關を越えて、いふところの『關中』を制し覇を天下に唱ふることも近きにあらう。すなはち『中原の鹿』を追うて、『關中』を支配することも、モハヤ目捷に迫つてゐるのである。わが勇士の『長安一片の月萬戸衣を搗つの聲』を聞くのも遠くはあるまい。黄河はかくして日本民族のリードするまゝに流れるのである。 昭和一三・一・三〇

北支那の斷面

南苑の閲兵式

十月十日は双十節で、支那ではもつとも大切な國民のお休み日で國慶として全國的な祝祭日である。私たちはてうどその日を、北平で迎へた。氣候は暑からず寒からずまことに一年中のもつともよい季節で、家々には鉢植の菊の花が盛りで、コスモスのなよ〳〵した花が、風に動くのも風情がある。同盟通信社の横田北平支局長が、かねて奔走してくれたので、私たちはその日の南苑における宋哲元の閲兵式にも參列し、午後の懐仁堂における梅蘭芳の觀劇にも招待された。これは、行きずりの旅行者にとつては、容易に得難い偶然のよい機會で、私たちの今度の旅行中におけるもつとも記念すべき好もしいもの〻一つであつた。

宋哲元は、支那における國民的慶祝日である双十節を選んで彼の威容を示すべく、内外貴賓數百名を招いて彼の手兵たる第二十九路軍の閲兵式を南苑に行ふたのである。しかも支那においてはこの種閲兵式を行ふのは、今度がはじめてであるから、それは恐らく歴史的な劃期的な閲兵式といふべきものであらう。けだし冀察政權が去年の十二月十八日宋哲元によりて旗上げされてから、まだやつと滿一年にも達せぬ短時日であるが、彼の政權は、モハヤ儼然として動かすべからざる一つの事實となつてしまつた。それを内外に誇示するために、この日の閲兵式は、宋哲元にとりて、もつとも必要な、有意義な事業であつたと思はれるである。蔣介石の南京政府が、險悪な日支問題の交渉にアタマを惱まし、双十節のお祝ひどころでない際に北平では、宋哲元が『これ見よがし』に盛大な閲兵式を行つて、悠々として人生得意の頂點を誇示したことは、私たちにとつても、窃かに愉快に感ぜられたことである。

この日、北平から約七、八里の郊外にある南苑まで自動車を走らせるには、五十分はかゝるであらう。ことに數百の内外貴賓が、いづれも自動車を驅るのであるから、路は相當混雑するであらう。私たちは前日から二臺の自動車を約束し、それには警備線を自由に出入しうる臨時通過證を自動車に貼附し、閲兵式場への入場證を胸にブラ下げて時刻を違へず南苑に馳せつけた。北平の前面の繁華な大通りは清掃されて、巡警や警備兵は、われらのために交通整理をなし、路がいよ〳〵郊外に出ると一般庶民の交通は、全然禁止されて、たゞわれ〳〵閲兵式參列者のみを走らせることが分つた。これは隨分思ひきつた英斷で、宋哲元の威勢のいかに徹底してゐるかが想像された。すなはち五歩にして巡警を配し、十歩にして警備兵を置き、道路を清め、砂を掃き、路傍に盛砂をし、道路夫と掃除夫とが、無數にこれらの道路を守つてゐるさまは、てうどわが國における行幸時の、嚴肅な道路警備を髣髴させるものがあつた。

この日、宋哲元が、南苑の閲兵場においてわれ〳〵參列者に配布した記念品の中に『孟子擇要』といふポケット形の小册子がある。その册子の表紙には『國民二十五年雙十節、宗哲元贈』といふ金文字が刷られてゐる。これは孟子の正心篇を擇要して、それに註釋を加へたもので宗哲元み

づから、序するところによると、この小册子は、彼の第二十九軍の將士をしてこの一編を手にして、時々これを讀ましめ、勉めて替ることなからしむるための教訓であることが分る、すなはちこの小册子は宗哲元の軍隊手帳であり、軍人教育書でもある。彼は孟子の『正心篇』をもつて自からを教育し、軍人を教育し、支那救國の實をあげようとしてゐるのである。彼はもうすでに王者の心術をもつて、冀察政權の責に當つてゐるところが見える。

孟子の正心篇

この日、南苑に閲兵された宋元の第二十九軍は、歩、工、砲騎の順序で、堂々約二萬位の大兵で分列式を行つた。最初、私たちは『外賓』接待所から、宋哲元を中心とする閲兵臺に案内されそれからゾロ〳〵と廣い練兵場の土埃にまみれながら、軍隊の整列せる前面を見て廻つた。しかしながら、これらの軍隊が『氣をつけ』の姿勢をとつて、いつまでも緊張し切つてゐる前を、ゾロ〳〵といつまでも歩いてゐることは兵士諸君に對しても氣の毒であり、それにぐるりと練兵場を一巡することは、とても大儀な、厄介千萬な負擔でもあるので、私たちは途中から、練兵場を斜めに横切つて、もとの閲兵臺へ歸つて來た。てうどそのころから、閲兵臺の前では軍樂隊が劉喨たる行進曲を奏すると各隊が一齊に動き出して、分列式を行ひ閲兵臺の上に立つた宋哲元君の前面に來て隊旗を捧げ、指揮刀を斜めにした一隊が、歩武堂々と『頭を右に』勇ましく行進し去るのであつた。そんな光景が約一時間も連續したであらう。くもり日の空からは、折々うすい日の光りが、軍隊の銃劍を照らし、飾り立てた紅白の慢幕や造花の裝飾に守られて、美しく化粧した内外貴婦人たちの花やかな享樂氣分が、閲兵臺上にも漲り渡つてゐた。それは勇壯でもあつたが、また美しい平和な光景でもあつた。閲兵臺の後方は、廣い食堂になつてゐて、式が終ると、爭ふて食卓につき、なごやかな氣分で美酒佳肴を貪ぼる貴賓で忽ち百花繚亂の姿を呈した。

私たちは、食卓の方は失敬して一足さきへ歸途についた。歸途の自動車の混雜をおそれたのと一歩、後れようものならば、濛々として立ちのぼる土煙りの煙幕に、一寸さきも見えないほどの後塵を拜して、のぞを侵される心配があつたので、まだ道路の清いうちにそこ〳〵にして南苑を辭去したのであつた。しかしいふところの第二十九軍は、支那第一の精鋭をもつて鳴るところの

軍隊であり、軍裝も清潔に整つてをり、兵士の年齢に老若の差がなく、一定の壯丁でまとまり、凝視する兵士の視力は、機械的にガラス玉を箝入したように恐ろしく膠着固定してゐるところなど、むしろモノ凄さを感ぜしめるものがあつた。たゞ慾をいへば、支那第一を誇るこの軍隊にはタシクがなく、飛行機がないことである。さうした兵器や、兵團なしに近世の戰爭が有能な働らきをしようとは思はれない。これらの兵士が、傳統的な支那の武器であるサック入りの青龍刀を背の毛布にくつつけてゐるのは、むしろ不用である。第二十九軍に必要なのは、青龍刀ではなく飛行機であると、私には思はれた。それはとにかくとして、私たちは支那の軍隊の行動を、集團的に見ることを得たのは、實によい見學であつた。

宋哲元君は、この一年ばかりの間に、見ちがへるほど、どつしりとした重厚味を加へて來たことは事實である。とかくに危ぶまれて來た冀察政權の存在と、存續も、今はもう歴然たる事實として、何人も無視することのできない發達を見せてゐる。南京政府の蔣介石をほどよくあしらひながら、一面には日本軍部の指導をほどよく受け流して、不即不離の態度で、どちらつかずの日和見をつづけてゐる間に、彼はぶく〳〵と膨れて行つた。聞くところによると、彼の第二十九軍に對して南京政府から月々三十五萬元の補給を受けてゐるといふ噂であるから、この際、サツパリと南京政府と手を切ることは、損德の上からいつてもできさうもないことである。さりとて南京政府の意のまゝに動いてゐては、冀察政權は日本からとり上げられてしまふかも知れぬ。だから宋哲元君は、このまゝの現狀を維持してさへ行けば、孟子の正心篇を、自己の軍隊に熟讀させて、北方を支配して行くことができるわけである。仕合せなのは、とにかく宋哲元君である。

愛すべき宋哲元

閱兵式の前日、私たちは、宋哲元を、彼の役所の奥深い應接室に訪づれた。六尺近い巨大な彼の躰軀から感ぜられるものは、たゞ子供らしい無邪氣さであつた。どこにも一クセありさうな、警戒すべきものを感じない。彼の兩手の指先は、磨いたように白く、美しく女の手をみるようであつた。彼の顏は茫漠として圓滿である。彼の傍には、クセモノの陳覺生君が控へてゐて、私たちの話を、注意ぶかく聞いてゐるが、日本語の通ぜぬ宋哲元君は、私たちの話してゐる間は、一向、私たちのハナシに注意する必要もなく、それを通譯が受けとつて彼に話す段になると、うん

〳〵と頭を振りながら聞いてゐるのである。そして自分がそれに受け答へて話をする段になると何と驚くべきことには、その聲が音樂的に、金鈴を打ち振るような滑らかな美しい響きをもつて聞えて來るのである。よく澄んだその聲音には、細い女らしいひゞきはなく、もつともよく訓練された天成の美音が、なだらかに音樂のように流れて來るのである。私はこんな美しい男性の響きを聞いたことがない。洋々として流れる大江の流れを聞いてゐるような快よい聲である。彼はこの美聲をもつて彼の軍隊に號令したのであらう。そして彼の軍隊はこの美しい音樂的な金鈴のひゞきに魅せられて、彼のいふがまゝに忠實に動く軍隊となつたのであらう。

廣い彼の客間の、大きな安樂椅子にゆつたりと巨大なからだを埋めて、坊主刈りにした面長なアタマをふり〳〵、私たちに彼の意見を述べてゐる態度は、いかにも子供らしく、無邪氣である彼の背後には白堊の大圓柱が天井を支へてゐる。その前にどつかとイスに掛けてゐるさまは、てうど四本柱の前にあぐらをかいてゐる相撲の年寄を見るような感じである。それは往年の若き日の栃木山を見るような恰好である。私たちは、一見、忽ちにして無邪氣なこの人物に好感を有つことができた。

實をいへば、この一ケ月間許りといふもの、宋哲元はひそかに懊惱、煩悶の日をつゞけたらしい。彼はある重大な人生のモーメントに立つて、くよ〳〵と心配したものらしい。政務に對しても、ひそかに興味を失つたのではないかと想像される日が續いた。これは大きな變動を前にしてこの種の最高責任者が感ずべき、ある重大な問題について思ひ迷つてゐたためであらう。それがてうど私たちの北支へ入るころになつて、宋哲元君はさつぱりと朗らかになつた。それは天津にわが田代駐屯軍司令官を訪問して以後のことであるといはれる。田代司令官と、宋哲元君との間に、どんなハナシが交換されたか、それは私たち外間の知るべき限りでない。たゞ宋哲元君が北平に歸つてきてからは急に双十節の國慶日を祝福するための準備に忙がしく、思ひ切つてハデな閲兵式をあげ、觀劇會をも催すことになつたのである。一言にしていへば北支は落つくべきところに落着いたのである。そして宋哲元君の冀察政權は、徹底的な安心さをもつて强化擴大に歩、一歩、前進するであらうことが想像せられる。

宋哲元が、私たちに會見した時にも、彼は徹底的といふコトバを二三回もくりかへして、彼の誠意といふべきものを披瀝した。そこには南京政府に對する多少の氣兼ねもあり、支那人としての面子もあり、また自尊心もあることは十分理解してやらなければならぬが彼が完全に、日本との經濟合作によつて、北支の開發を希望する意思は、徹底的に明瞭であるかに感ぜられた。この意味で、彼はもう完全に朗らかであつた。今年の双十節は、彼にとつてもつとも喜ばしい祝節であることは明らかである。

萬壽山と天壇

午後四時から、私たちは中海公園の懐仁堂における觀劇會に出席したいと考へ、それまでの時間をもつとも有効に過ごしたいといふので南苑の閲兵式を終ると、そこ〳〵にして北平郊外の萬壽山見物に出かけた。

北平の西北方のはづれに西直門がある。自動車がそこにさしかゝると、密集した往來の群衆で道路が塞がつて、三十分ばかりは身動きもできない。けふは双十節の祝日で、全市民が一日の行樂に出かけるのであるが、西直門外には當日無料公開の植物園があるので市民はいづれもそこへ押かけるものとみえ、てうど門外を横ぎる汽車のため、往來が遮斷されることが分つた。かうした混雜の中にあつても別段巡警は交通を整理するでもなく、一般民衆のなすにまかせて、悠然と時節を待つてゐるのである。このアキラメ切つた漫漫的なところが、支那生活そのものであると私には考へられる。

切りつめた時間に、見るべきものを見ようとする私たちには、一分間の停滯といへども重大事であるが、事、こゝに至つては、やはり時節を待つより仕方がない。そこで私たちも漫々的の氣持ちになつて、路の開けるのを待つた。支那人を相手としての外交や、交渉ごとは、萬事、漫々的に限る。あせつては失敗する。氣長く待つより外に仕方がないのである。

萬壽山は北平郊外十五哩の地點にある。山によつて宮殿樓閣を築き、それに湖に臨める長い畫廊を配して、結構の雄大、豪壯を極めたもので、けだし清朝宮室の遊園である。私たちは大理石

の樓船の湖中に突出せるあたりから、小舟を艤して昆明湖をよぎりつゝ、湖上からその樓閣を大觀した。舟は枯れ盡くした敗荷の亂立してゐる湖上をわけて、漣波を立てゝ漕いてゆく、遠望すればこんもりとまるく膨らんだ翠柳が、群をなして遠く眼界の彼方を遮ぎり、湖は周圍數哩にも達するであらう、茫々漠々たる湖上の景觀は、たゞそれ翠柳と、敗荷とが、蕭條として秋いたく老けたるを物語つてゐる。しかるに顧みれば、岸には巍然たる高樓が全山を蔽ふて、突屹として聳え立つてゐる。人工の雄、傳彩の妙、五彩絢爛として實に人目を眩惑せしめるものがある。蓋し昔の阿房宮の壯大も、よもこれにはおよばじと思はれる美しさである。かくのごとく支那の造園術たるや、一面においてはあくまで人工の雄大を極め、一面においては造りすてたる自然の景觀を、あくまで荒廢のまゝに委せ切つたあたり、その配合の妙を極めてゐる。日本の小さくまとまつた箱庭式造園術を見なれたものゝ眼には、支那のこの思ひ切つた壯大な結構を見ては、思はず茫然として長大息せざるを得ない。

前日、私たちは北平市街において、天壇を見物した。天壇は、支那の宮室において、即位の禮を天に告げるところで、もつとも森嚴なる儀式の行はれる場所である。朝鮮の京城にも天壇があり、今は朝鮮ホテルの一隅に、みすぼらしい古蹟をとゞめてゐるが、北平における天壇は、古今を絶する壯大なる規模によりて結構されてゐるのである。私たちは、まぶしい太陽の輝やく大理石の天壇に立つてひそかに支那人の底知れぬ大きさと、ずば抜けた大膽さと、限りもない宮廷造營のための浪費ぶりに驚歎したものであるが、今、萬壽山に來て西太后の日夜、歡樂をきはめたといふ遊園地を見て、ホト〳〵支那人のしまりのない大きさに驚かされたのである。その建築には、何の見るべきものもなく、一々の繪畫も、一々の建築技術にも、淺薄、輕佻を極めた低級のものではあるが、それを綜合大觀するときには、雄然たる一大美觀を呈するところに、支那のしめくゝりのない大きさがある。けだし支那は古來、それをもつて異邦、異人種を壓倒驚歎せしめたのである。

冀東政府

冀察政權といひ、冀東政府といひ、近ごろ日本の新聞紙上にも毎日のように繰返されるコトバ

であるが、さて、その冀といふのは、現在の河北省地方をさすコトバである。文章軌範の韓退之の章を讀むと、『伯樂一たび冀北の野を過ぎるや、名馬空し』なごといふ名文で日本人にもよく知られてゐる冀北がすなはちこの地方で、昔から馬の產地をもつて有名である。すなはち冀察といふのは、冀州（河北省）と察哈爾省との二つを合せて造られたコトバであり、冀東とは、この冀州の東といふ意味で新造されたコトバである。

昭和九年五月三十一日、天津の南方塘沽において、梅津、何應欽兩氏の間に停戰協定なるものが設定せられ、いはゆる非難地區を次のごとく決定した。

一、中國軍は速かに延慶、昌平、高麗營、順義、通州、香河、寶抵、林亭鎭、寧河、盧台を通ずる線以北および以南の地區に一律に撤退し、自後、同線を超えて前進せず、また一切の挑戰、攪亂行爲を行ふことなし。

二、日本軍は第一項の實行を確認するため、隨時飛行機およびその他の方法によりこれを視察す

中國側はこれに對し保護および諸般の便宜を與ふるものとす。

三、日本軍は第一項に示す規定を中國軍の遵守せることを確認するにおいては、前記中國軍の撤退線を越えて進擊を續行することなく、自主的に概ね長城の線に歸還す。

四、長城線以南にして第一項に示す線以北および以東の地域內における治安維持は中國側警察官これに任ず。

五、本協定は調印と、もに効力を發生するものとす。

引用がすこぶる長くなつて煩はしいが、これが停戰協定の全文である。

冀東政府は、この停戰協定地域內を範圍として、南京政府から獨立した特殊の區域で、こゝにも支那兵が一兵もなく、たゞ一萬五千の巡警が治安の維持に當つてゐるのである。殷汝耕君は、最初、南京政府からこの戰區行政督察專員として通州に派遣されてやつて來たのであるが、昨年の十一月二十五日つひに冀東防共自治委員會を設定し、戰區の財政獨立を宣言し管下二十二縣の縣長に對し、自後各縣の稅收を河北省政府へ送金するの必要なきことを命令し、進んで同十二月二十五日には冀東防共自治政府といふ看板をかゝげて今日におよんでゐるのである。

私たちは、小山代議士に隨從して、北平に入つた翌日、通州に殷汝耕君を訪問した、私は去年の暮れの十二月二十八日、冀東政府の看板が塗りかへられた三日目に、通州を訪問したので、今度の通州訪問は二度目の經驗である。驚いたことは、北平から通州街道を東に入つて、いよ〳〵冀東政府の領域に入ると坦々たる大道が、すつかりと鋪裝されて黑くなつてゐることであつた。殷汝耕君の善政がまづ道路の上に表はれて、支那一流の砂塵の舞ひ上らぬよう鋪裝路を完成したことであつた。殷汝耕君は、支那民衆を幸福にするためには、まづ何よりも善政を行はねばならぬ。その善政の第一は道路の改善と、治水の完成とである。昔から支那の名主賢君は必ずこの二つから善政に着手した、すなはち道路と治水との改善が、支那の政治にとつては第一の要道である。殷汝耕君は、支那古來の賢君名主に倣ふて、すなはち、これを冀東政府の領域内に實行したのである。

通州は人口七、八萬の都會、冀東政府は孔子をまつる大成殿の一廓にその政廳を設けてゐるのである。政廳の背後には、隋の開皇年代に築造された石造の十三重塔が時代的な古びをおびて天空を突いて聳えてゐる。これを前にして彼の政府は、いとさゝやかな存在を誇つてゐるのであつた

幸運の殷汝耕

わが小山代議士は早稻田大學の出身なので、殷汝耕君との談話は、まづ母校早稻田の學園のことからはじまつた。殷汝耕君は最初鹿兒島の高等學校で、工科をやつたが、革命のために支那に歸り、その後、ふたたび日本へやつて來て、早稻田に入つた。その當時、永井柳太郎氏が教授で口頭試驗の際には支那革命を論じて談論往復數時間におよび、ために他の學生たちの口頭試驗の時間を大部分、殷汝耕君の雄辯で獨占してしまつた話などを、機嫌よく物語るのであつた。

殷汝耕君の、冀東領域における庶政一般の抱負や、日滿支經濟合作についての意見などは長々しくなるから、こゝでは略して置かう。とにかく冀東政府は、目下、財政的にも綽々たる餘裕を示し、狹い政府の政廳内をいろ〳〵に手入れをして、すこぶる立派なものに仕上げてゐる。私たちは夾竹桃の紅い花をつけた靜かな庭園内の、とある殿内で午餐の饗應になつた。冀東政府ではもう吾々日本からの視察者に、おいしい支那料理を振舞ふだけのゆとりができて來たのである。

その翌十日の双十節には、北平在住の日本藝妓十餘名をわざ〳〵通州へよんで、ほがらかなお祝ひ氣分に浸るだけの餘裕ができて來たのである。

殷汝耕君は、冀東地方が、支那では歴史的に古い文化をもつた地方であることを、私たちに說明してくれた。その話の中に、吾々日本人にも分るのは、伯夷叔齊が首陽山に隱れて、蕨をくつたといふその首陽山が、冀東地域内にあるといふ話であつた。周の粟を食むことを潔よしとしないで、首陽山に隱れた伯夷叔齊の昔がたりを、通州に來て、親しく殷汝耕君の口から聞く事は、私たちにとつても多少の感慨なきを得ないのである、今、殷汝耕君は南京政府から離脫して、蔣介石の粟を食まずといふ意氣をもつて、戰區地域の、一小天地に立てこもつて、滔々たる支那四百餘州の排日氣分に反抗してゐるのである。その決心の中には、悲壯なるものが動いてゐる。蕨は冀東地方の一名物であるが、幸ひに殷汝耕君は蕨を食ふほどに窮迫してゐないばかりか、ます〳〵景氣よくやつてゐることである。

冀東の地域内には開藥炭鑛があり、長盧鹽がある、この石炭と鹽とは、日本の資本家の資本的援助をまつてゐるところの有望な物資である。全体に冀東の地域は他の支那がさうであるようにほとんど悉くが農民生活者をもつて充たされてゐる、從つて農業的開發によつて、支那農民の生活が改善され、向上されるわけである。殷汝耕君の政府は、いま、これに向つて懸命の努力を拂つてゐるのである。私たちは殷汝耕君を中心とする冀東の各政府要人等の記念撮影をして、そこ〳〵にして通州を辭した。かへりみれば、去年の暮れは出來上つたばかりのこの政廳の表門は古び、古色蒼然たる黑い柱であつたのを今度はデカ〳〵とまつ赤な色に塗りあげ、支那一流の牌樓には『德配天地』といふ金文字の額をかゝげてこゝにも小さいながらも、得意の王者ぶりを發揮してゐるのであつた。とにかく失禮な話ではあるが殷汝耕君が、去年の暮、三萬圓の資金をもつて、冀東政府の旗上げを決行した當時は海のものとも、山のものとも、見當がつかなかつたが、今では、時代の風雲兒として、たつた一年ならざるに、三百萬圓の預金を正金銀行にもちこみ、月々奥さんが札束を抱へて銀行へ通ふといふ話であるから、とにかく一代の好運兒といふべきであらう。それで殷汝耕君の獨裁專制は、ます〳〵强化擴大され、この政府の前途は洋々として、

春の海のごときものがある。冀察の宋哲元とならんで北支における幸福をあくまで享樂しうるのはとにかく仕合せな話である。

蔣介石と北支問題

目下、日本と支那との間に横たはる問題は、大小となくすべて北支問題に、關聯してゐると思はれる。滿洲問題は、もうすでに支那にとつて過去の歴史的問題であつて、彼らの手の届かぬ問題になつてしまつた。從つて眼前のあらゆる日支關係の問題は、北支に集中されてゐるといつてよい。北支那が、南京政府の統一的支配下から離脱することは、容易にのぞまれさうもないが、さりとて南京政府がこれを自己の權力下に、完全に引つけて離すまいとする努力も、また容易に酬はれさうもない。今日の北支は、もう昨冬、冀察政權や、冀東政府の成立した當時の北支とはすつかり面目を一新してゐるのである。そこには漸進的ながら、南京政府の如何ともすべからざる特殊な成長力をもつてゐるの事實を無視することはできぬ。

成都事件にしろ、北海事件にしろその後頻々として生起するところの中南支方面の、排日的不祥事件は、それらを通觀して、いづれも北支に進出するわが日本の勢力に抗爭する南方支那の甲斐なき不斷の反抗とみられないこともない。最近、蔣介石の杭州會議は、山東の韓復渠など、北支の將領をも加へて、支那側の對日對策を協議したと傳へられるが、それは畢竟北支問題の波及を、いかにして抑制しようかといふ腐心焦慮に過ぎないのである。

この場合、わが國は、南京政府を相手どつて、とかくの取り極を決定する必要はない。實をいへば川越大使が、わざ〳〵蔣介石を引つ張り出して、何事かの談判を進める必要もないことだし川越對張群の會見などを開催して北支の特殊關係を認めさせようなどゝする外交手段を弄する必要もないことである。北支の方面からみれば少くとも北支問題に對して南京政府の介在容喙を許す必要はないことである。南支那に起つた不祥事件を機會として、今さら觸れるべき必要のない北支問題に、彼ら南京側をして發言、論議の機會を與へしめることは、わが有田外交の失敗であらう。

由來、支那、ことに蔣介石の南京政府が、排日政策をとつて、彼の政權を內的に强化、擴大してゐるのに對して、わが國がいつまでも、彼を相手に親善政策を强要してゐることが一種のあやまりである。親日を欲せざる相手にあへて、親日を押つけることは、あまり賢明な政策ではない彼が排日政策に徹底してゐる限り、われはつとめて親日などを强化しないで、打ちすてゝ置けばよいのである。わが方はたゞ信ずるところを行へばよいのである。けだし排日を徹底させることによつて、早晩、もつとも大きな破綻をこうむるものは南京政府であり、蔣介石であつて、決してわが日本ではない。蔣介石がもしあくまで排日政策を個執するならば、彼の政權は、早晩自滅するであらう。その自滅の時期は、北支におけるわが國の實力の自然に增大進展しつゝある現狀よりみて、あまり遠からざる將來のことであらうと想像せられる。

しかるにわが日本の新聞紙は、この大局に着目しないで、いたづらに支那の問題に神經過敏な報道をして、いかにも報道機敏をほこることを能事にしてゐるかにみえる。それによつて支那の形勢をみてゐる日本の讀者は南京政府の態度に、一喜一憂してゐるようであるが、こんなことは苟くも大日本の態度であつてはならぬのである。今日、支那のことは何ら日本にとりて憂ふべき問題ではない。蔣介石の對日態度のごときはもとより、齒牙にかけるほどのものはないのだ。少くとも北支問題は、すでにモハヤ決定してゐると私には思はれるのである。しかるに、何を苦しんで北支特殊地域たることを南京政府に認めさせる必要があらう。

阿片と排日

宋哲元は、吾が小山代議士と會見の際、北支經濟工作についてはあくまで日本と提携してやつていくべきであることに、何らの疑問をもつてゐなかつた。彼は、特別に美しい彼の金屬的なヒビキのある聲をもつて『明白了麼』をくりかへしてゐた。支那語の分らぬ私達ですらそのミンバイラーマといふことばを、會見の後まで覺えてゐて、それがどういふ意味かを私たちの左右の通譯子に聞き質したほど、宋哲元君の明白了麼は、印度的なヒビキを私たちに與へたのであつた。

宋哲元の廣い書齊には、かつて南京政府の行政院長であつた林森のかいた『春暉永駐』といふ

扁額が掲げられてゐる。吳佩孚から彼を禮讃した『慶衍萱堂』といふ六づかしいゝゴトな書も掲げられてゐる。段祺瑞からは『萱闈集祐』といふ四字を大書して、宋哲元に贈つてゐる。これらの扁額を、彼の書齋に掲げてゐるところを見ると、彼の交友、先輩の如何なる人人が、彼に厚意をもち、禮儀をよせてゐるかが、それとなく想像されるのでめる。宋哲元の先輩である馮玉祥の書もなければ、況んや蔣介石の書も見當らないのである。段祺瑞と、吳佩孚と、林森とが、彼のために延喜のよい文字を選んで、彼を祝福してゐるのを見ると彼の北支における冀察政權の態度方向のいかなるものであるかが想像されるではないか。すなはち蔣介石の意思も、權力も、感化もモハヤ今日では、宋哲元に何らの影響を有たないであらうことだけは明白である。宋哲元のことばをかりていへば、それはもうミンバイラーマであるのだ。日本の外交官たちは、すでにそれを十分に讀みとつてゐるはずである。それだのに、なほ、無用の川越對張の會見をくりかへさうとしてゐるのは、その何の故たるかを知るに苦しむのである。

天津の日本租界に隱れてゐる王楫唐君を訪問した時にも、王君はわが小山代議士との間に隔意のない意見を交換した。その談片にも興味ぶかいものがあつた。王楫唐いはく

『支那は今、物質救國から精神救國へと轉向しなければならない。支那の强味は土地の廣大なことである。資源はいくらでもわが支那に埋藏されてゐる。ゆゑに、自己を修める精神さへあれば、資源の分配などは心配する必要はない』

王楫唐君は、巧に日支の精神提携、文化提携の必要を說いた。おたがひに露骨な話は避けてゐるのであるが、相互尊重の誠意さへあれば、日支は共存、共榮しうるといふ主旨を說明したものである。彼は、笑ひながら、アゴに流れる長髯をかき流しつゝこんなこともいつた。

『日本は、唐時代から、いろ〳〵のものを支那から取り容れたが、婦人の纏足だけは取り容れなかつたのは、まことに結構だつた。支那では御承知の通り、阿片吸煙の弊があるが、これは昔から支那にあつた習慣ではなく、近世になつて外國から學んだ惡習である。もとよりケシの花は昔から支那にあつたのであるが、阿片の吸煙は近來のものである』

こんな話をして、王楫唐君はしみじみと支那の恐るべき惡習を、今さらのように顧みるのであつた。

阿片の吸煙を支那に教へたものは誰であるか。いふまでもなく、それはイギリスである。この人道上の一大悲慘なる惡習を支那人に植つけて、支那人の精神体力をメチャ〳〵にすることを考へたイギリスは、今、蔣介石の南京政府を背景としてひそかに日本に對抗してゐるのである。そして阿片よりもさらに有害、有毒な排日政策によつて、支那自身を自滅に陷れやうとしてゐるのである。阿片の害毒にめざめた支那は、さらにそれよりも恐ろしい排日の害毒になぜ目ざめ得ないのであらうか。

濟南の小鳥市

濟南で朝早く、寢臺から起されて、プラットホームへ降り立つた時は、まだ午前五時半だつた。驛の構内は、睡むさうな電燈が、暗い闇の中にまたゝいてゐた。とにかく出迎へに來てゐる宿引に荷物を託して夜明方の街に出た。朝飯を終ると、すぐ市内の見物に出かけた。膠濟線の一番列車の出るまでの一時間半を、有効に見物しようといふのである。

私たちは、いつしか城壁の上を走つてゐた。濟南事件前迄は、城壁の上を通行させなかつたものであるが、今は自由に車馬を城壁に驅ることができ、市民唯一の行樂場として、有閑人のひまつぶしにはもつて來いの場所となつてゐる。

濟南は人口四十萬、山東省の首都で、近く黃河の流れを控へて、水の豊かに、綠樹の多い市街である。城壁の上から見渡すこの街は池沼と、楊柳との交錯した瑞々しい田園都市の趣きがある。關帝廟の赤い門柱に立つて、高い石段の上から、眼下にしら〳〵と展開する池沼の水面をみてゐると、日本へ歸つてきたやうな安らけさを覺える。

しかし私は、こゝでソンな濟南の風景を說くつもりではなかつた。私の感じ入つたことは、まだ朝の早い城壁の上には、見る〳〵、例の有閑人が小鳥籠を提げて集つて來て、朝日ののぼるころの美しい空氣の中に小鳥を、いたはりながら、その泣き聲に聞き惚れてゐる光景であつた。これは小鳥の泣き聲を競爭する競技會でもあり、又小鳥市といふべきものであつたかも知れない。無慮數百の支那人が、無慮數百の鳥籠をさげて、各々小鳥のさへづりに聞き惚れてゐる光景は、

まことに泰平の逸民であると思はれた。その鳥籠の群集のところどころには、それをあてこんだ大道藝人の一群が、へんな手まねで拳をくねらせながら、大地にうつる樣々な投影を樂しんだり足をあげて鞠をけるまねをしたりして、ぎつと嘶し合つてゐるのである。

支那人は一体に根氣がよく、この根氣よさは、牛馬を手馴らすこと、小鳥を飼育することに現はれてゐる。つまり人間が牛馬と一つとなり、小鳥の氣持と一致するところまで、自分を悠々と氣長くもち扱ふのである。彼等は決してアセらない、無理をしない、あくまで自分を相手に同化して、そして相手が自分になつて來るまで待つてゐる。支那の外交は、この小鳥飼のコツである。こちらがあせればあせるほど相手は悠然と落ちついて來る。これが漢民族の特質である。牛馬を友達とし、小鳥を友人として自己にひきつけることを知つてゐる支那人といふものは、實に偉大な驚歎すべき存在である。

この根氣よさと辛抱づよさは、數十年來の支那の生活の中から自然に學びとつた支那人の武器である。彼らはこの漫々的な、氣長い辛抱づよさをもつて、年々襲來する旱害にも堪へ、水害をも潜り拔けて來てゐるのである。そしてぐんなに自然が慘虐の災禍をもつて彼らを脅かしても、それを天命だとあきらめて、少しも悲觀するといふことを知らない、あくまで樂天的な民族にてきてゐる。人間の力をもつてしては、ぎうすることもできないもののあることを彼等自然の教訓によつて呑みこんでゐるのである。

私たちは濟南城の城壁から、よく耕された大根畑の青々と生育してゐるのを見、畑をめぐつてポプラの並みつゞく埃りつぽい街道の、ずつと街へ續いてゐるのを見、その一本の田舍道をとぼ〳〵と歩いてゆく汚ない支那人の生活をぼんやりと見つめながら支那人といふものを、いろ〳〵に考へて見たのであつた。

山東苦力の氾濫

私たちは、朝の七時半から、夜の六時半まで、一日ぢう、山東半島を汽車で走つて行つた。濟南から青島までのその汽車の兩側に沿つて、ポプラや、楡や、楊柳の林が美しい並樹の影を造つ

て、そこには赤煉瓦づくりの停車場や、それに附屬する鐵道舍宅が建られてゐた。これらの樹林や、停車場はドイツの建造した當時のまゝを引ついだもので、ドイツがいかに大規模な、雄大な意圖をもつて山東半島の經營に從事したかのおもかげを偲ばしめるのである。

私たちは先日來、毎日北滿の茫漠たる荒野を見ながら、そこに働らく山東苦力の恐ろしい移住力と浸透力とをつくづくと考へて、彼等の故郷なる山東半島を見なければならぬと思つた。今は滿洲國政府や、わが關東軍當局の方針として河北、山東方面の農業移民を滿洲に入れることを禁止し、さらに朝鮮人の移住に對してはある種の制限を附してゐる、これは偏へに日本の農業移民を滿洲によび迎へるための深い考慮から來てゐるのである。すなはち支那移民は禁止、朝鮮移民は制限、日本移民は奬勵といふ三原則が滿洲國に確立されてゐるのである。それにも拘はらず山東苦力の滿洲入國は一年四十萬の多きに達するのである。かつて二、三年前までは、年々百萬人から百三、四十萬人の山東苦力が滿洲に入つて來たのにくらぶればこのごろの四十萬人の移住は非常な減少といはねばならぬ。この四十萬人の山東苦力は、滿洲において少くとも一年に二百圓

の稼ぎ高をのこすのであるから、彼等が一年に滿洲から故郷へ持つて歸る金は八千萬圓から一億圓の多きに達するであらう。滿洲經營のための血の出るような金が、日本人のふところに落ちずして、年々一億圓以上づゝも山東苦力に奪ひ去られるといふことはわれ〳〵の大きな問題でなければならぬ。

山東、山西、河北の三省を合せてその住民は八千五百萬人であるといはれる、これにチャハル綏遠二省の人口を加へると優に一億に達する。いふところの北支五省は人口の過剰にこまりぬいてゐるのである。チャハルと綏遠の外蒙を除いた山東、山西、河北の三省、すなはち北支の心臟をなすところの地域には人口が過剰をつげてゐるのである。この過剰人口が、衣食を求めて滿洲國に殺到するのは、きはめて自然の要求であるといはねばならぬ。それを人爲的な政策によつて抑止しても、潮のごとく流入する山東、河北の移住民を防ぎ切ることは出來ぬ。彼等は山海關を越えて滿洲へ入ることを禁止せられ、海路大連を經て入國することも禁止されてゐるので、やむを得ず遠くチャハル省に出て張家口方面から、外蒙を迂回して、ドン〳〵滿洲國へ流れこみつゝ

あるのである。

もし、年々四十萬の山東苦力が滿洲に入國するとすれば、十年で四百萬人、二十年にして八百萬から一千萬人近くに達し、そして滿洲國は事實、完全に支那人の占有に歸してしまふであらう。拓務省が明年度豫算に繼續事業として八億の滿洲農業移民費を織りこみ、二十年間に百萬戸五百萬人の移民を送らうとするのは、實に滿洲國を完全に日本の延長たらしめなければならぬとする主意に外ならない。もしこの移民計畫が實現されないとすれば、それこそ日本民族發展の最後の行きづまりとならなければならぬ。

私たちは、そんなことを考へつゝ、山東半島を西から東へ横斷した。見渡す限りの乾燥した半島の土地は、根氣よく耕やされて、累々たる僅少の墓地をすら惜むものゝように、その根元まできれいに耕作されてゐた。耕地の缺乏に惱むものは日本のみではなく、彼等もまた、さうであることをしみ〴〵痛感した。

支那民族の特質

北支那は、この一年間に、見違へるやうに成長した。北平は、南京へ政府の政廳が移つていつてから、急に寂れ出し、人口百萬を割るとまで心配されてゐたが、宋哲元の冀察政權が確立してきてから急に人口增加の步調をとり戻して來た。昨年百萬臺であつたのが、今年は百五、六十萬人だと稱せられる。とにかく北平の人口が急激に增えて、市街は繁榮を回復した北平市民にとつては、仕合せなわけである。

最近日本が北支に對して、武力的に威壓を試みないで、親切に經濟工作をもつて漸進しようとする方針が決まつて來ると、それで宋哲元はヤレ〳〵と落着いて來る。そこを見込んで北平の大學教授や學生たちが、またソロ〳〵と排日運動の氣勢をあげる。それをやらぬと南京政府に申わけなしとでも考へてゐるのであらう。あたり觸らぬ程度で、排日の聲明書を出して見るのである。これが支那の姿である。

北支における排日は、去年以來退潮したといふのではないが、日本の力が次第に強くなつてゐるので、さして排日が苦にならない、その點で、北支の排日は、もう峠を超えたと、私には思はれるのである。由來彼等の排日はインテリ層と學生層とを中心とするもので、いはゞ實際生活の利害に關係をもたぬ有閑階級の閑事業である。一般の支那人は排日などに何の意義も、興味も感じてゐない。だから、こちらで默殺してゐれば、それでもすんでゆく問題である。それをムキになつて詰め寄せると、問題は多少やゝこしくなる。つまりその程度の排日である。

支那には風潮といふことばがある。支那人を說明するには、もつとも適當なコトバである。支那にとつて、すべてが風潮である。風のごとく來り、風のごとく去る或ひは潮のごとく來り、また潮のごとく去る。それの潮來するときは、いかにも恐ろしい姿でやつてくるが、いつのまにか潮のごとく去り、風のごとく消えてゆくのである。排日もそれである、抗日もそれである。それの過ぎ去つたアトには何等の痛ましい痕跡を殘さないのが風潮である。だから支那人は、旱害についても、水害についても、共匪についても、政匪についても、すべてを風潮だと考へてゐる。

それの通りすぎてしまふのをヂッと我慢して待つてゐるのである。

これは、青島で聞いた話であるが、支那の女工を使つて紡績をやつてゐる日本の會社では、決して日本の如く女工を寄宿舍に一緒に收容してはならないさうである。支那の女工にはミンな別々に獨立の家屋を與へて別々に生活させるのださうである。これは支那人の個人主義からくるもので彼女等は寄宿舍の共同生活にたへない。もし彼女等を寄宿舍に一緒に入れて置くと、頻々たる盜難事件などが起つてうまく行かないといふのである。そこにも支那の國民性が見られる。また支那人は株式會社などといふ大きな資本的經營にたへない性格をもつてゐる、彼等が極端な個人主義だからである。支那の大會社は、父子兄弟親戚などが寄り集つて重役となり、各自自己の懷中を肥すことばかりを考へて、まじめに事業をやらうとしないから、どの會社も成立すると、數年を經ずして潰れてしまふ。すなはち彼等は共同生活に對する本義が分らないのである。それは支那國民性の個人主義のためである。

支那の政治家もまた支那の國民性たる個人主義の外には何ものもない。彼等が軍人となり、官吏となり、政治家となるのは、自分が金を儲けて、自分が享樂したいからである。それが支那人の生活理想である。だから支那には日本にいふがごとき國家觀念といふものがない、愛國心といふものがない、南京の蔣介石も、もとより支那人としてこの國民性を多分に保持してゐることはいふまでもないであらう。

察北綏東

支那は、今、次第に統一の機運に向いてをり、それは蔣介石を中心として歩一歩と進行してゐるやうである。昨年十一月南京政府の斷行した幣制改革が、やはりこの統一を一層强化、擴大せしめた觀があるのは事實である。その一面には、支那にも國家的意識が次第にめざめて來てゐることも、統一機運を、押し進めてゐることを見遁してはならぬ。そして排日はこの支那の國民的意識を覺醒せしめるためには、もつとも直接的な効果的な手段として、彼等に利用されてゐるのである。もし支那が排日をやめたならば、蔣介石政權は立ちどころに崩壞するであらう。しかしながら苟くも日支、國を隣して相交はつてゐる間柄で、日本を相手として排日を鼓吹し、それによらなければ、自己の政權を維持し得ないような不德義な政府の存在を許すべきでない。だから日本はかくのごとき南京政府を相手として、外交的交渉を行ふがごとき優柔不斷の態度を一擲しなければならぬ。日本にこの決心さへあれば、蔣介石政府の存在のごときは、忽ち夢のごとくケシ飛んでしまふであらう。

だが、吾が外務省に、今のところ、その決心がありや否やは疑はしい。このごろの上海から南京、漢口に至る長江貿易は、近來にないめざましい活氣をもつて動いてゐる。日支交渉が險惡で中南支那にどんな大問題が勃發するかも知れないと思はれる時に當つて、揚子江沿岸の貿易が、かくのごとき活況を呈してゐるのは、支那側が日本に斷乎たる決心のないことを見すかしてゐるためである。一言にしていへば『日本に戰意なし』と彼等は見縊つてゐるためである。すでに『日本に戰意なし』と見れば、彼等はそれをよいことにしてつけ上つて來る。支那が近來『日本と一戰を辭せず』などと强がつてゐるのは、この日本の態度を觀測しての反映に過ぎない。つま

り日本が強く出ればへコみ、日本がおとなしくなれば強く出て來るのである。目下の日支交渉はかうした空氣の中で行はれてゐるのであるから、支那はさん〳〵に日本を彌弄して、要求條件を割引きさせようと覘つてゐるのである、だから私は、日本が南京政府を相手にして區々たる外交交渉を行つてゐるのは愚の極であると考へる。

しかしながら、日本は支那に對して、アセル必要はない。日本の力はヂリ〳〵と支那に延びつゝあるのである。ドシ〳〵經濟的の進出、企業の進出を企てゝよい時機である。排日のごときはもとより恐るゝに足りない、それは支那民衆に浸潤したる思想でなく、たゞ社會の表皮に動いてゐるさゞ波に過ぎぬ。目下、日本は『察北綏東』の方面に、旺盛な國力の氾濫をみつゝある。支那問題は表面平靜であるが、これから吾々日本人にくりかへされるのは『察北綏東』といふコトバであらう。之がやがて日本の流行語となつて、支那を語るものが一樣に『察北綏東』に視野を向けるのも遠くはあるまい。そして蔣介石が杭州會議や、西安會議をいくたび開いてみても、滔々として潮來する吾が勢力を押かへすわけにはゆくまい。日本民族は今や、南京政府の向背如何のごとき小さい問題にかゝはつてゐるべき時ではない。アジアの大陸を蔽ふて殺到しくるソビエート・ロシアの侵略を、吾々の手で防護しなければならない時に迫つてゐるのである。もし支那が、吾々日本と共に防共政策に同じでないならば、日本は獨力をもつてこれに當らなければならぬ問題はロシアの東進力を日本が大陸においていかに食ひ止めるかにある。要するに二億のスラヴ民族と、四億の支那民族と、そして一億の日本民族とが、アジア大陸を舞臺として演ずる民族角逐の大鬪爭が、廿世紀の大問題なのである。イギリスや、アメリカはこの大芝居に對しては、モハヤ棧敷の見物に過ぎないであらう。暫らく以上をもつて私のこの稿を終る。

——昭和十一年十月——

蒙古

蒙古支那に非ず

蒙古は支那ではない。支那はかつて一度も蒙古を領有支配した歴史がない。その反對に蒙古が支那を征服支配したことはあるけれども、その支配が崩壞するとともに蒙古に退却して支那と關係を斷つてしまつた。元の成吉斯汗、忽必烈の時代がこれである。だから蒙古に對して、支那はその主權を主張する何等の權利はない。蒙古は蒙古であつて支那ではないのである。これと同じことが、滿洲についてもいひ得る。

滿洲は支那ではない。支那がかつて一度だつて、滿洲を領有支配した時代はないのである。その反對に滿洲から起つた愛親覺羅氏が支那を征服統一したことはあるけれども、その支配が崩壞

し、清朝が亡びて、ふたゝび滿洲帝國として復活したのであるから、滿洲は結局支那の支配を受けたことがないのである。それに對して南京政府が、もし今なほ滿洲に對して主權を主張するのだつたら、それは得手勝手な話で、全く理由のないことである。滿洲は滿洲であつて支那ではないのである。

この理屈が南京政府に分つてゐないし、日本の一般にも分つてゐない。けれどもこの事實は事實である。そこで蒙古は、十餘年前からソビエート聯邦の一つとなつて、全く名實ともに支那とは關係がなくなつてゐるのである。

とり殘された內蒙古は、もちろん支那の領土でもなく、支那の支配のおよばぬ地域である。そこで蒙古人にして、ソビエート聯邦下に走ることを欲しないものは、滿洲國に入つて、滿洲帝國の統治下に服することゝなつた。興安四省がそれである。

興安四省はすでに滿洲帝國の統治下に入つたが、殘されたる內蒙古は、北支の北方になほ荒漠

たる地域を有つてゐる、この内蒙古は地勢上、政治上、ソビエート聯邦に入つて行かない地域である。さりとて支那の統治下に行くことを欲しない地域である。それが滿洲帝國の接壤地域に位置してゐるのである。この地域はロシアにもあらず、支那にもあらず、滿洲國でもない特殊の地區である。ここに獨立、自治の運動が起り來るは、勢ひの當然である。こゝに今、問題が發生しつゝあるのである。

全体、支那の主權は人民にある。すなはち主權在民の國柄である。支那では昔から『王侯將相豈に種あらんや』といつて、支那を支配するものは誰でもよいことになつてゐる。ある特定の一人が支那を支配しなければならぬといふ理由はないのである。支那四億の人民は誰が立つて支那を支配してもよいのである。この意味を極端に押し詰めて行けば、支那四億の人民は、みんな一人々々がその主權を主張しうる權利をもつてゐるのである。すなはち支那の主權は論理上四億に分裂するの可能性をもつてゐる。これを反面よりいへば、支那人は何人にも支配されないで各個が一々に獨立自由の天地をもつてゐるといふことになるのである。一人一國家である。だから南京政府の蔣介石が、みだりに主權を主張するのは、支那の國家的性質を理解しないものといはなければならぬ。

支那が一人一國家であるといふことは、結局支那が統一國家として完成するの時期は永遠に來ないであらうといふ私の結論になるのである。殷汝耕君の冀東政府もこの意味で立派な一つの獨立國家と認めてもよし、冀察政權の宋哲元を、一つの獨立國家と認めてもよい。乃至その他の政權が、各地に分立しても、決して支那の主權が毀損されたのではない。支那の主權は元來、多數に分裂すべき性質を有つてゐるのである。現に支那はその國を『中華民國』と稱し、『主權在民』の主旨を國名において明かにしてゐるのである。だからたとひ蒙古が支那の領土であつたとしても、それの獨立することに何の異議を挾む理由はないのである。

滿蒙一体の認識

蒙古は、前にもいつたごとく、支那ではない。支那には政治的支配關係も、從屬關係ももつてゐない。だから蒙古の問題について、南京政府が彼是いふの權利はない、また蒙古の問題について、日本がかれこれと支那政府を相手として論議する必要はない。

しかしながら、蒙古と滿洲とは極めて密接な關係がある。元の世祖忽必烈が蒙古から起つて支那を統一したが、元が亡ぶるや、明となつた。すなはち漢人種が支那を支配したのである。その期間は蒙古人は蒙古に退却して、支那と交渉を有たなかつたのである。しかるに清朝が滿洲から起つて支那を支配した時には、蒙古はそれ以前から、滿洲と往復し、清朝と親交を結むで、清朝の祖先を蒙古の可汗として推服してゐた。すなはち滿蒙一体の關係に立つてゐた。そして清兵とともに明征伐に從事してゐたのであるから、漢人の支那とは少しも關係がない。清朝の君主が支

那に君臨してゐる間は、清朝の君主を通じて、支那が蒙古と一緒になつてゐるといふ意味もあるが、蒙古の可汗たる清朝が退位すれば、すなはちその瞬間から支那と蒙古との關係は斷絶するわけで、中華民國がいかなる形式でできたにせよ、清朝の君主に代つて蒙古を維持せんとするは、僭越といはなければならぬ。

日露戰爭後、三十有餘年間、苟くも日本人にして東亞の時局を語るほどのものは、必ず滿蒙を口にせざるはなかつた。滿蒙に自由の天地を見出すことが、日本男子の本懷なるかに鼓吹せられた時代もあつた。その時代には、滿蒙を一体として、そこに日本の特殊權益、特殊地位を設定すべく、日支の外交文書に、それが明記された時代もある。

しかるに滿洲事變が勃發し、滿洲國が生誕して以來、わが國民は注意を滿洲に集中した結果、いつのまにか、蒙古のことを忘却したかに見える。滿洲國の誕生する以前までは、滿鐵調査課で發表する資料は、すべて『滿蒙』で押通してゐた『滿蒙要覽』といひ『滿蒙年鑑』といひ、蒙古は滿洲と一体であるといふ考へで取り扱はれてゐた。しかるにそれが滿洲國の獨立するとゝもに

蒙古のことは切り離されて、滿洲だけのことしか問題にしなくなつてしまつた。今日、私の手元へ滿洲日々新聞社から送つて來た昭和十二年の年鑑を見るも『滿洲年鑑』と稱し、もう『滿蒙年鑑』とよばなくなつて來た。これは何でもないことのやうであるが、既往三十有餘年間、わが日本の朝野が滿蒙一体の觀念に立つて、經營を進めんとした大目的に背くものではなからうか。

全体、今日まで、吾々日本人が『滿蒙』の經綸を叫んで來たのは滿洲を中心主題とするためで蒙古のことは、ホンの滿洲を說くための修辭的形容詞として、お義理に附加しただけのものであつたであらうか。吾々が、滿蒙と併べ稱して來たのは、たゞ爽快な英雄的覇業の夢を、國民に滿足せしめるために用ひられた空漠な名稱だつたのであらうか。ナゼ、最近の日本人は滿蒙と併稱することをやめて、たゞ滿洲のみを問題にすることになつたのであらうか。滿洲國といふ大きな收穫に滿足して、もう蒙古のことは忘れ去つてもよいと考へるに至つたのであらうか。私たちの先輩は、すでに明治三十七、八年戰役以後から、引續いて滿蒙の經綸、國策を叫んでゐた筈である。それを忘れては相すむまいではないか。

吾々日本人が、過去三十有餘年間滿蒙一体觀の上に立つて、東亞建設の理想を國民に鼓吹してゐたのは、滿蒙が歷史的に一体であつて、しかも支那本土とは政治的に何らの關係のないことを理解してゐたゝめであると思はれる。しかるに近ごろの日本人は、全くそれを忘却して、蒙古經營は、支那の領土に對する侵略であるかに考へてゐるもの少くない。蒙古も滿洲も支那ではないのである。そして蒙古も滿洲と同じくあくまで支那の支配下に立つことを欲しないのである。この事實を認識しなければ蒙古の問題は論ぜられないのである。

コツ〳〵主義をやめよ

もし、蒙古が吾々日本民族の、英雄的な夢を滿足させるだけのもので、あへて直接、日本に關係がないといふならば、蒙古のことは忘れてもよいであらう。しかし、今日の蒙古はソンな夢の問題ではない。現實の活きたる血潮の湧き立つ問題なのである。それだのに日本の新聞は、何等蒙古のうごきを傳へてをらぬ。蒙古のみならず、支那に關する肝心の問題を傳へてをらぬ。これは必ずしも新聞社の怠慢の罪とのみはいへない。あるひはそれらを新聞紙に傳へることを遠慮す

べく強制されてゐるのかも知れない。しかしながら、これは日本國民をして、次第に蒙古を忘却せしめ、蒙古から遠ざからしめることである。

かくのごとく日本國民をして、蒙古の存在を忘却せしめるやうな方策をとりながら、一面において、蒙古がいかにも日本の重大關心事であるかに裝ふヂエスチャーがほの見えてゐる。これはいかにも矛盾の甚だしきものである。こんなアイマイ矛盾の態度をとつて、外交と軍事をくらがりの中で、こそ〳〵とやつてゐて、どうして日本民族の大陸發展といふがごとき國策が遂行されるだらうか。日本國民の志氣を積極的に堂々と鼓舞すべき發展的信念の發露なくして、どうしてこの大業が圓滿に遂行されるだらうか。この意味において、秘密外交と、秘密軍事に沒頭しつゝある官僚、軍部は、ほんとうに反省すべきである。區々たるパンフレットによつて、狹少な一部にしきりに宣傳をことゝするがごとき姑息な態度をすてゝ、堂々、全世界と、全日本國民を指導するの大信念に立つて行動すべきではないか。

全体、日支の外交問題についても、國民はもつと正直に、その眞相を告げ知らされてゐなければならない。それがクソ隱しにされてコソ〳〵と何ごとかをくらがりの中でやつてゐるので、國民の興奮や、輿論の起りやうがないのである。いかに支那から排日されても、その排日のために吾が同胞の生命がしば〳〵犧牲にされても、國民は一齊に立つて、支那の反省を促すといふやうな國民的運動がどこにも起つて來ないではないか。日本國民は、どんなに見縊られ、踏つけられても、何の憤激も、興奮も感じないで、平然としてゐるほど國民的氣力を失つたのであらうか。私は決してさうであるとは思はない。これは政府の官僚的秘密主義と、官僚的專制獨裁主義の、ひとりよがりの行動のために、國民の輿論が起りたくても起り得ない狀態になつてゐるのである

しかしながら、政府の秘密主義、官僚主義、コソ〳〵主義の背面には、蒙古が、まだ支那の主權のおよぶ地域だとても考へて、遠慮してゐるためではなからうか、もしそれならば、まずその認識を改めてかゝる必要がある。蒙古は支那ではないのである。

蒙古はゴビの砂漠を中心として漠北と漠南とに分れる。漠北を外蒙古とよび、漠南を內蒙古とよんでゐる。支那本部からいつて、近きがゆゑに內蒙であり、遠きがゆゑに外蒙である。その外蒙はすでに完全にソ聯の聯邦となつてその赤化の魔手は漠內におよばんとしてゐる。そこに蒙古自治委員會なるものが發生して、ソ聯の蒙古人民共和會に對抗せんとする運動が成長しつゝあるのである。これがいふところの蒙古獨立運動なるものである。

この運動を牽制するために、蔣介石は西安から洛陽に移つて來て、綏遠省首席の傅作義らを先頭に立てゝ、內蒙の西北から包圍的隊形をもつて綏東に迫つてゐる。いふところの『バルカン綏遠』の渦紋が、その地點に渦まいてゐるのである。私が先月支那から歸つて、その視察記をかいた中に、近く「察北綏東」に問題が發生するであらうことを豫報し、今後日本人のアタマに（察北綏東）なる新らしいコトバを刻みつけられるだらうといつたのが、それである。

夢の國ではない

日本は今、南京政府に對して、北支五省の特殊地域たることを認めようといふ要求を提出し、支那はこれを拒絕してゐるといふ話であるが、そのコトは今こゝでしばらく問題としない。しかしながら全体、北支五省とは河北、山東、山西、察哈爾、綏遠の五省を指すのであるが、嚴密にいつて、察哈爾、綏遠の二省が北支の中に包含されて、支那の領土的主權の存在すべき地域であるか否かは、私の疑問とするところである。何となれば察哈爾、綏遠の二省はいふところの內蒙古であつて、萬里の長城の連亘する北方の地域に屬してゐるのである。支那は二千三百年前の、秦の始皇帝の時代に、萬里の長城を築いて、それ以北を關外の地として、彼等を遮斷したのである。すなはち察哈爾も、綏遠も、支那の支配のおよばぬ地域であることは萬里の長城によつて明らかにしたのである。そして支那から遮斷されたこの地方は蒙古人の住むところであつて、漢人の住むところではない。

たゞ清朝が三百年前、支那を統一して以來、ロシアが北方から、しきりに蒙古の北邊を窺ふの危險があつたので、それまで支那を一人も入れなかつた蒙古へ、封禁の制を破つて、次第に支那

人を入れることになつたのである。これはロシアの侵入を防護するための清朝の國防策であつて支那が蒙古に支配權を樹立したのではない。今日も依然としてその通りであるから、察哈爾、綏遠二省を北支に加へることは妥當でないと信ずる、この意味からいへば北支五省でなく、北支三省であつて、察、綏二省は支那の領土的支配の意味を抹削して差支へないものである。そこで最近北支で日本の手によつて作られてゐる地圖では、內蒙古中の綏遠と察哈爾は、從來の三分ノ一位のものに縮少されてしまつて他の三分の二は、もう北支那ではないといふ意味を明らかにしてゐる。內蒙古の政治的、社會的、經濟的、歷史的な諸事情を綜合してこの地圖の塗りかへは至當のことであると思はれる。

北平の北方、平綏線によつて北上すること六時間にして張家口に達する。そこは察哈爾省の首都であつて、こゝで、萬里の長城を超えると直ちに內蒙古である。チヤハルとは蒙古語で『近邊』を意味する。長城の北邊に接近した地方をよぶところから起つた地名で、元の嬀裔たる林丹汗が韃靼の小王子の後であるといふので、蒙古統轄の權利を主張し、王公を意味する可汗と稱してこの地に駐牧することゝなり、爾來、こゝを察哈爾部と稱することゝなつた。これらの歷史からいつても、察哈爾が支那でないことは明らかである。

現在、大連から張家口まで、一週二回、定期に飛行機が飛んでゐる。蒙古は、吾等にももう遠隔の地ではなく、大連から一日にして飛行しうる近接の土地となつてゐるのである。さらに張家口から、外蒙の庫倫まで、ゴビの砂漠を橫斷して、自動車が連絡運轉されてゐるのである。從來この張家口から庫倫までの內外蒙古を連絡する旅行は、少くとも片道五、六十日を要したものであるが、今日では自動車によつて三、四日で到達することができるのである。かつて十餘年前わが鳥居龍藏博士は、考古探險のために蒙古に旅行された時には、この間に二、三ケ月の日子を費されたものであるが、今は千里の砂漠も一日にして通過することができるのである。だから、蒙古は、現代のわれ〳〵にとつては、もう遠い夢の國ではないのである。現實のあはたゞしい爭亂の渦紋の巷となつてゐるのである。それがロシアと、支那と、日本との間に爭はれてゐるのである。かうした意味から見て、われ〳〵はもう一度しつかりと蒙古を見直さねばならない。そして

三十有餘年間、滿蒙一体觀をもつて取扱つて來た日滿の遠大な理想が、着々として實現しやうとするの時期であるから、私たちは現實の問題として、私たちの身近く蒙古を引きよせて、考へるべきであると信ずる。

當面の蒙古問題

蒙古の人口は明かでない。清朝の統治時代には内外蒙古を合せて全人口約三百萬乃至四百萬人と稱せられたもので、これは當時、壯丁檢出の嚴しかつた時代の、壯丁數から類推したものである、清朝のもつとも隆盛を極めた康熙、乾隆の時代に、蒙古は三十萬の壯丁を出してゐたところから、かく三百萬乃至四百萬と稱したのであらう。しかし只今では實際は二百萬はむつかしく百五十萬位のものであらう。

露國人バトルスキーの一八八九年出版の著書によると

内蒙古	百萬人
外蒙古	五十萬人
科布多地方	二十八萬人
唐努烏梁海	四萬五千人

と計算してゐるが、昭和四年滿鐵調査局發行の『支那の制度より見たる蒙古』によれば、百十二萬六千四百五十人といふ數字をあげて百五十萬には達しないと斷言してゐるのである。即ち、

同書では

内蒙古	八七八、四〇〇人	塔爾巴哈台	七、〇〇〇人
外蒙古	八九、五〇〇人	伊犂	三八、〇〇〇人
科布多	二二、五〇〇人	青清蒙古	五三、〇五〇人
唐努烏梁海	二七、〇〇〇人	西套蒙古	四、五〇〇人
阿爾泰	七、五〇〇人	計	一、一二六、四五〇人

と、計算してゐる。とにかくソ聯邦に屬する外蒙が約九萬人であるのに、目下わが國の關心事となつてゐる内蒙が約九十萬の人口を有つてゐるのは、彼此對照して、興味のあることである。

本紙十七日附の夕刊に出てゐる。伊克昭盟は內蒙古においても、有力なる大盟で、盟內には二百七十四の佐領を包有し、一佐領から百五十名の壯丁を徵發し得る制度であるから、四萬一千百名の壯丁を有する。今もう一つの德王の率ゆる錫林格爾盟は百十三の佐領を有し、壯丁檢出數は一萬六千九百五十名であるから前者の二分ノ一强の劣勢である。この二盟が全版圖をあげて德王側に合流したといふのであるから、いふところの察北綏東を全地域として、そこに一つの有力な內蒙政權の樹立したことを物語るものである。

この內蒙政權の强化、擴大に對して、南京政府が晏如たる能はず綏遠西部からこの政權確立を妨害しようとするの運動が開始され、上海救國團においても綏遠省首席傅作義に對して、『一死もつて外敵に當り國境を護れ、われ〳〵はあらゆる努力を盡し物質的援助をなすべし』と、激勵してゐるのである。しかしながら綏遠省が果して北支五省の中に包含されるべきか否かは、前述のごとく疑問であり、支那の國境線がどこに設定せられてゐるかは、何等の確定したものがない。加ふるに綏遠の傅作義が、はたして首席として綏遠に、實際的な支配統治を行つてゐるとは考へられない。蒙古の實際は、支那の政治的支配のおよばぬ組織になつてゐるのであるから、彼等が「國境を守れ」といつてゐるその國境なごは、どこにも蒙古內には嚴存してゐないのである

元來、支那はその昔、萬里の長城を築いて、北方よりする夷狄の侵入を防ぎ、そこに國境線を劃した以外には、どこにも國境といふべきものを設定してゐない。從つて支那には長城以外に國境といふものがないのである。もし彼等の「國境を守れ」といふコトバに從ふならば、彼等は蒙古から退却し察綏二省から退却して、長城線以南に歸るのほかはないのである。目下、問題となつてゐる內蒙は元來支那ではないのである。

錫林郭勒盟

蒙古は海拔一千メートルの高台で、坦坦たる沙漠地帶が、草原地帶に續いてゐる。一年の中春秋がなく、夏は短く冬が長い、しかし夏季には紅黃白紫の野生の植物が草原を蔽ふて、一望千里錦繡の美觀を呈するが、冬は、草枯れ蓬絕えて胡砂ふく朔風の凜烈たる高原である。こゝにはか

つて世界を震憾せしめ、史上不滅の光彩を放つた英雄チンギスカンおよび世祖フビライが、交々立つて、蒙古民族のために萬丈の氣を吐いたことは、人のすでに熟知するところである。こゝに今も約百五十萬の蒙古民族が、昔ながらの游牧生活をなつかしみながら、次第に游牧から農耕生活へと轉化しつゝあるのである。

しかしながら、蒙古民族が世界を震撼したのは、彼等が游牧民族であつたからである。いはゆる水草を追ふて轉々として移住するところの游牧生活は、彼等を殺伐にし、强勇にし、全世界を征服するの恐るべき民族たらしめた。しかるに蒙古大帝國の滅び去つて以來次第に游牧生活から農耕生活へと變つて來た。そして彼等が、北方の梟雄たる武力的な氣魄は次第に失はれて來た。けだし民族が農耕定住の安定生活に入るとともに戰鬪性は漸次喪失して、平和的となり從つて彼等が本來の性質であるところの殺伐な戰鬪的勇氣を銷磨するに至つたのはやむを得ない。

天の運行には定めはない、

人の生命は永久ではない、
死なぬといふ聖水をのんだものがあるだらうか、
現在、餘暇あれば、樂しんだらどうだ、

世の中の景色に變りはない、
だが、人の容色は保てない、
死なぬといふ聖水をのんだものがあるだらうか、
現在、餘暇があれば、樂しんだらどうだ、

我等は同じく、良く、永久に樂しまう、
我等は游牧をしようとする、
これを守つて、永久に樂しまう、

これが游牧蒙古人の歌である。彼等はあくまで現實主義者で、享樂生活に生きてゐる民族である。彼等は樂天的で、明朗な性格をもつてゐる。蒙古人の性格が、この素撲な民謠の中に、明らかに現れてゐるのを感ずる。

元來、彼等は游牧民族であるが故に、一定の土地私有觀念をもたなかつた。しかるにその游牧集團が、一定の地域に封じこまれると、もに、土地共有の觀念を生じたのであつた。これが游牧時代の共同社會の傳統と、游牧形態が、土地の狹少な分割を許さぬところから生じたものと見られる。今日でもなほ蒙地は個人の私有でなく、旗民の共有であるとの主張が行はれてゐるのである。土地はかく共有であるが牧畜については私有が認められてゐる。すなはち清朝以降における蒙古社會には、土地の共有制と、牧畜の私有性が併立した。これが蒙古社會の特殊な財產形態である。

清朝は、相隣接する一定の地域内の旗をもつて、チゴルガン、（盟）を組織せしめた、盟制度は、指定せられた地域内各旗の王公が、三年に一回づゝ一定の場所に集合して、過去の報告をなし、將來の方針を協議するもので、この盟の集會をチゴルガン、チゴルガン（盟會）と稱する。盟の名稱は盟會を開催する場所にちなんで附したもので、たとへば錫林郭勒盟は、現察哈爾省北半部の五部十旗の王公が、錫林郭勒（ゴロは河の意）の河畔に盟會を開いたのでこの名がある。

ラマ教改革問題

清の史家趙翼は『元之天半亡僧』といつて、元の亡びたのはラマ教のためであると喝破してゐるのである。我が矢野仁一博士は『蒙古においてラマ教が盛んになつたことは、蒙古に旗制が布かれたことと共に、蒙古の歷史、延いては支那の歷史を一變せしめた重大な事件であつたと認める」と述べてゐる。ラマ教は蒙古の歷史において亡國的な役割をつとめたところのもつとも重大な原因である。蒙古人がラマ教に心醉して亡國の淵に陷つたのは、支那人が阿片の吸飲に心醉して、亡國的民族に陷つたのと同一で、むしろそれ以上の弊害的陶醉であり、ラマ教は精神的陶醉である。支那はアヘンを人民から引離すことに努力してゐるが、蒙古人の社會からラマを引離す

ことは、ほとんど不可能であると考へられてゐる。「宗教はアヘンである」といつたロシア共產黨の痛罵は、蒙古においては實にそのまゝ眞理である。實にラマ教は、蒙古民族の進取、勇武の精神を麻痺せしめた最も恐るべきアヘンである。

この意味からいつて、ラマ教の淨化、革正は、日本佛教徒に課せられた大きな問題であるといつてよい。

ラマは西藏文の經典を讀むのみで、その經典は、地理、歷史、數學、物理、化學、天文、易學教育、倫理、醫學より房事に關する事項までを含んでゐる。元來、佛教經典なるものが以上のごとき諸學にわたつて、廣範な問題を說いてゐるのであるから、西藏經典にそれらの說述されてゐることは當然であらう。

ラマ教はたゞそれを讀むだけで、ラマの行儀はたゞ祈禱によつて保たれ、祈禱を失へばラマの生命は失はれるであらうと評せられる程に無價値である。しかしながら蒙古人の宗教的感情および知識の程度では、いまだラマ教およびラマに對する客觀的批評を許さないのであるから、ラマ教徒にあらざるものから、蒙古社會におけるラマ教の弊害を指摘して、これを淨化革正せしめる政策が行はれねばならぬ。

ラマ教は、チベットの佛教で、それは弘法、傳教などが日本に輸入した以前の密教に屬するもので「雜密」とよばれる不純な密教であるから、これを日本の密教によつて、ラマに教義的な肅正を企圖する事は、わが國密教學者の義務であると考へられるのである。この意味で滿蒙の開發に當つては、蒙古人の宗教的信仰を淨化することが急務であり、進んでそれに當りうるものは、わが眞言、天台兩宗における密教學者と、密教高僧とであらう。兩宗當事者の奮起が望ましい。

ラマ教改革政策は、さしあたり日本佛教徒の進んで活動すべきシゴトの一つであると思はれるが、その弊害として普通に指摘せられるのは

一、ラマ教は蒙古民族の進取、勇敢の精神を麻痺せしめる。

二、男子人口の過半以上を無妻のラマとするので人口の減少を來す。

三、勞働力の旺盛な男子の過半がラマになるため蒙古社會の生產が減退する。

四、ラマは風紀紊亂し、蒙古社會の道德的頽廢を招來する。

以上は、いづれもラマ教の教義または教團の內容に觸れたものではない。從つてかゝる批難は部分的に當らぬ場合もあるであらうが、全体としては考慮を要するものが含まれてゐる。この意味で、ラマ教の檢討と、ラマの再教育による內部的改革が行はれて、近代的な宗教とならなければならぬ。蒙古問題が現實的な日本の問題となりつゝある時に當つてラマ教改革問題は、重要な意味を有つものであることを注意したい。

露蒙の關係

外蒙が、清朝から離れて獨立したのは、今から二十五年前の一九一一年である。その後ロシア帝政の崩壞をうけて、その混亂時代に一時支那は、漁夫の利を占めたやうな形で、外蒙を回復しようとし一九一九年には徐樹錚は都護使として外蒙の宗主權を監視したが、この場合にも、彼は册封使として活佛の前に册文を宣讀し、活佛はこれを親受した。これが民國時代における支那の外蒙古における勢力の絕頂に達した時代で、あたかもロシアの勢力のもつとも衰微した時期に當る。これは外蒙が支那に歸向する意思があつて進んで自治を取消したのではなく、徐樹錚の兵力に强壓されて、やむを得ず屈服したのである。

一九二〇年十月、セミョノフの白軍派露蒙軍が起つて失敗し、翌一九二一年二月第二回ウンゲルンの白軍が庫倫を攻擊した時は、蒙古人は之に應じて立つて支那兵を破つた、この時ウンゲルン軍は露兵三百、蒙古、ブリヤード、タタル等千數百の外に、極めて少數の西藏、支那、日本等の人民が加はつてゐたが、總數二千程に過ぎなかつた。然るにこれに對する支那軍の戰死は二、三千に達し、死亡殆ど盡くといはれたほどの慘敗を蒙つたのである。しかるにロシアの赤軍は、白軍の討伐を口實としてその後兵を外に入れ、その年の七月に庫倫は赤軍の手に歸した。かくして一九二一年七月蒙古人民革命政府は、赤軍保護の下に、庫倫に成立し、自來今日におよんでゐるのである。

「支那は理論においては完全なる獨立國であるが、財政上においては一々外國の制限束縛を受けてゐるではないか、支那においては獨立とか自治とかいふ問題は、現實的よりはむしろ架空的のものである」と、第一回の庫倫大使としてロシアからやつて來たヴアシリエフは斷言してゐるのである。これは今日においても支那は、その通りの國である。支那が內蒙外古に對して、主權を主張するのは理論的であつて現實的ではない。彼等は徒らに架空の問題に拘泥して理論鬪爭をやつてゐるに過ぎない。外蒙も內蒙も、決して支那の支配や統治を望んでゐないのである。

蒙古が支那ではなく、元來、支那とは關係のない獨立民族であるといふ證據の一つとして、こゝにロシア側の文獻を擧げて置かう。それは一九一一年、外蒙獨立當時ロシアのノーヴオエ・ウレミヤ紙が「露支外交の今昔」を論じた論說がそれである。その要にいはく「ロシアが現今のごとき國家の發展と、版圖の擴張をなすためには實に千百餘年を費してゐる。露支兩國領土の間には、兩國のいづれにも屬せざる東西五千露里の地帶があつて、兩國を隔離してゐる。最近まで兩國の國境地方北滿洲と蒙古とは、ほとんど無人の地にて支那人の居住者は甚だ稀少であつた。しかるに最近五十年間に兩國の關係は著しく變化した。一九〇〇年義和擧匪の亂が滿洲におよびし時以來、支那は領土保全のために、あらゆる手段を講ずることになつた、支那が第一に計畫したのは滿洲および蒙古におけるロシアの接壤地方に支那移民を送るにあつた。廣漠なる北滿洲にはすでにそれが着々實施せられた、に蒙古おいては、移民を經營するばかりでなく、露支條約に違反して、ロシア貿易に對し順序ある壓迫をはじめた。ロシアの方でもシベリアの移民に腐心し、支那も滿洲、蒙古の移民に熱心する結果、兩國の國境線はいよ〳〵複雜となり、ロシアの國境線はます〳〵不利を感ずる樣になつた」。

見よ、以上の論說において明かであるやうに、滿洲や蒙古に、支那人の移民のはじまつたのは極めて近世のことである。これは滿蒙が支那の領土でなかつた何よりの事實ではないか。

蒙古の資源

ノーヴオエ・ウレミヤ紙は、さらに所論をつゞけて曰く。

「支那は、引つゞいて蒙古の獨立狀態を失はしめるため、蒙古に對する政策を一變するに至つた。最初二百五十年間、清朝は蒙古に對して支那人の移住を禁じ、その領土保全を保障した。蒙古へ赴任する支那の官吏さへも、家族を携帶することを禁ぜられた。それのみならず支那人の蒙古において借地することも禁ぜられた。ロシアと接壤する廣漠なる蒙古の地は、移民開墾に適したるところでさへ、荒地として委棄されたのである。清朝のかくのごとき政略は、ロシアにとつて非常に都合よく、ロシアの國境内に支那人の侵來する危險は絶對にないので、ロシアは長き國境線を守るに僅少の兵力をもつてしても十分であつた、しかるに今日においては、支那の對蒙政策は全く一變した。」

このロシア側の文獻に徵するも蒙古がもと獨立の一天地で、支那に關係のなかつた由來は明らかであらう。蒙古はあくまで支那に歸服するを好まないのである。彼らはたとひロシアの支配下に立つも、漢人種の支配を受くることを欲しないのである。滿洲は清朝發祥の故地であるから、彼らは舊來の關係によつて、滿洲朝の下には喜んで歸伏するであらうが、漢人種には隷屬しないのである。かくして外蒙はロシアに赤化され、内蒙の一部はすでに興安四省となつて滿洲國の統治下に入ることとなつた。そして、のこされたるチャハル、綏遠二省において今、蒙古獨立軍の蹶起することゝなつたのである。これを蔣介石の支那軍が、國内の反軍を討伐するがごとく、當然のことと考へ手輕に扱つてゐるのは、蔣介石の認識不足である。

蒙古の地下には、豊富な鑛物を埋藏してゐるといふことは、多くの旅行者によつて報告されてゐるところであるが、土を掘ることを迷信的に厭忌する蒙古人の習慣に妨げられて今日まで精密な調査が行はれず、從つてその實相は明かでない。しかし採掘中の鑛物を地域的に示せば、

外蒙には石炭、金、銀、鉛、亞鉛、石墨などがあり、西部内蒙古すなはち察哈爾、綏遠、寧夏には石炭、鐵、金、銀、銅、鉛、石油、鹽、曹達、硫黄、石棉、磁土、水晶、アンチモニー、石灰、硼砂などがある。東部内蒙古はすでに滿洲帝國領となつてゐるのであるから、こゝにわざ〳〵それらの資源を擧示するにもおよぶまい。しかし綏遠、寧夏の鐵、石炭及び外蒙の金は世界的に注目されてゐるところの資源である。森林資源についても大興安嶺森林は推定數量六十億萬

石と稱せられ、滿洲東部の密林地帶に相對して、無盡藏の觀がある。

牧畜に至つては蒙古人唯一の基本的產業で、その家畜の種類は羊、山羊、馬、牛、駱駝の五種である。これら家畜の推定數は外蒙に二千六七百萬頭、チヤハル省の三百萬頭綏遠省に百二十萬頭、ブリカート蒙古に二百二十萬頭、滿洲國領興安省に百八十萬頭で、その中、羊及び山羊は總數の七〇%乃至八〇%を占めこれに次で馬が多數である。

支那商人は漢人特有の無恥と貪婪と、狡智とによつて、數理に乏しい蒙古人からあらゆる、欺瞞を弄して暴利を得てゐるので、蒙古人は商業を目して、ゴマカすシゴトであるとし、商人を【ボタルダ】すなはちウソツキまたは詐欺師と稱し蔑視し、これと同居することは勿論、近隣に住むことすら嫌忌する傾向がある。

以上、わが日本人の蒙古に關する認識を新たにせんがために、蒙古を大觀した。蒙古は「第二の滿洲」として、吾々に近づきつゝあるのである。—(完)—昭和十一年十一月—

隨筆　支那
(停)定價　二圓

昭和十八年一月五日印刷
昭和十八年一月十日發行

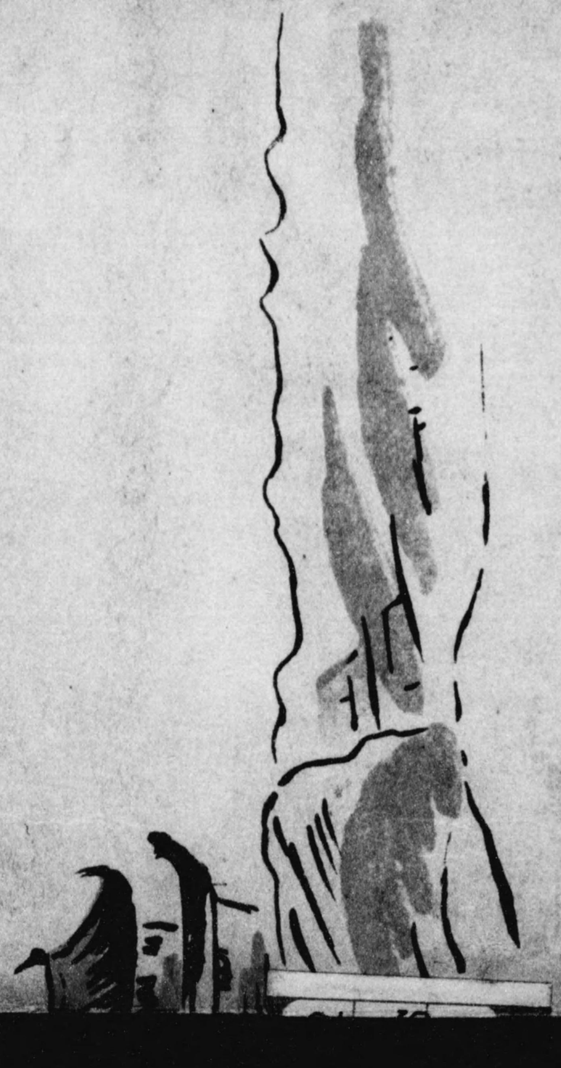
著者　小林橘川
名古屋市千種區田代町坂上七九番地
發行者　橋本龍助
名古屋市千種區春岡通二丁目一四番地
印刷者　山本靜雄
名古屋市千種區田代町坂上七九番地
發行所　教育思潮研究會
電話千種一二〇六番
振替口座名古屋九〇六二番
會員番號　一〇七〇二二番

出文協承認番號　あ200206

版權所有

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

中愛 157



2.00